元総社蒼海遺跡群（121）

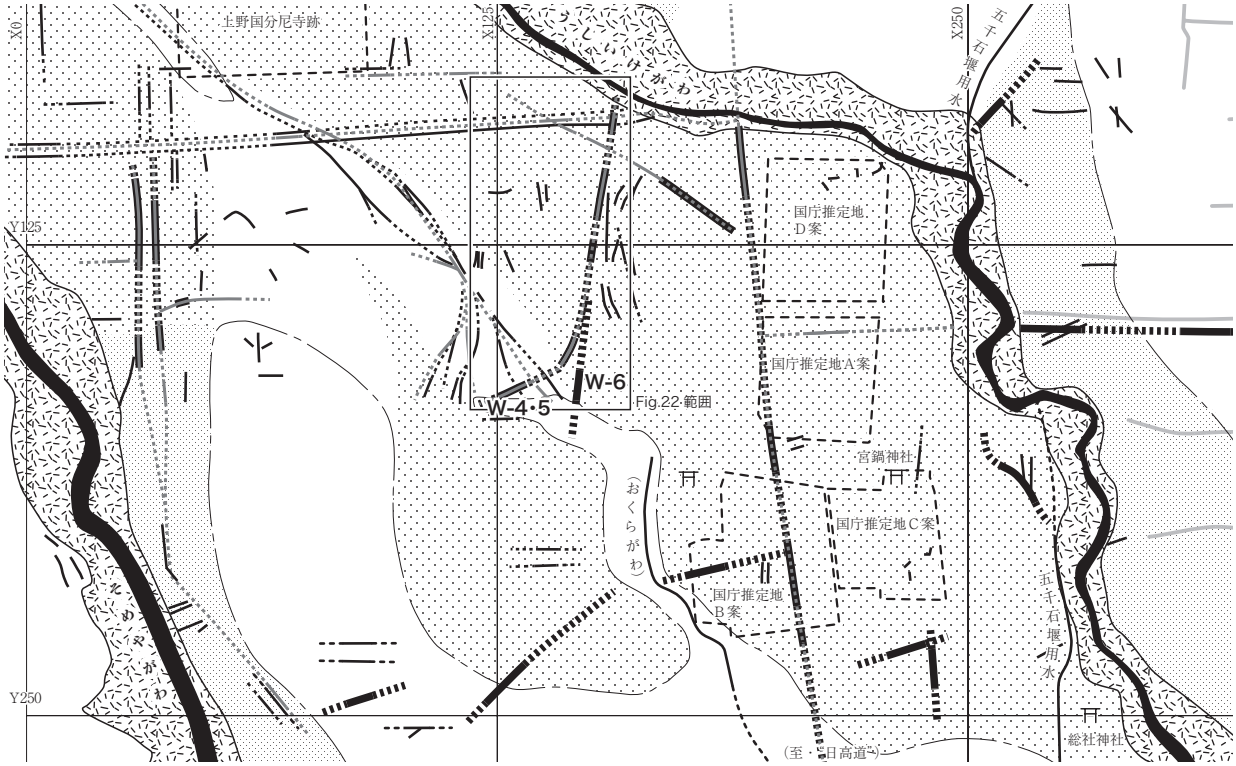
前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１７．３

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群（121）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



調査地点周辺の古代溝と道（S＝1／8000）

２０１７．３

前橋市教育委員会

【扉絵解説】

下図の地形区分図は、1967 年の都市計画図を基に、周辺調査地点の基本層序の所見と、工事掘削時に現れる路頭の観察、現況地形の踏査から、中世以降に推定できる大規模な地形改変の影響を加味し、推定した。粗い網掛けは微高地、細かい網掛けは自然堤防、不規則な網掛けは低地平野を表す。図中“おくらがわ”の記載は、川原 2011 より引用した。溝跡の時期は、主に As-B の堆積状況と遺構の重複関係から判断した。濃色の線は溝跡、淡色の線は道路状遺構と硬化面、破線は推定走向方向を表す。

Ｗ－４・５全景（南西から）

Ｈ－３・Ｗ－４・１号谷の重複関係（西から）

Ｗ－４壁面と底面の状態（南西から）

Ｗ－６遺物出土状況

Ｗ－６全景（南から）

はじめに

関東平野の北西部に群馬県は位置し、前橋市はその中央、上毛三山のひとつ名峰赤城を背にし、利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる県都です。豊かな自然環境にも恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、縄文時代の遺跡も、市内の随所に存在します。

古代において前橋台地は、広大な穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国分僧寺、国分尼寺、国府など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地であったことから、横浜に至る街道は「日本のシルクロード」とも呼ばれ、横浜港からは前橋シルクの名で海外に輸出され、近代日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（121）は、上野国府推定区域や上野国分僧寺・国分尼寺などの施設を擁する古代上野国の中枢地域であり、多くの注目が集まっております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出・確認はかないませんでしたが、古代の溝跡、竪穴住居跡、土坑などが見つかりました。今回の調査成果をはじめとしてこれまでの調査成果の蓄積は、国府や国府のまちの姿を再現するための資料と考えております。残念ながら、現状のままでの保存が困難なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進めることができました。また、猛暑の中、発掘調査担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成 29 年３月

前橋市教育委員会
教育長　　佐　藤　博　之

例　　言

1　本報告書は前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（121）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（121）
調査場所	前橋市元総社町 1776-1、1776-2、1789-2
遺跡コード	28 A 226
発掘・整理担当者	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 28 年７月７日～平成 28 年８月 26 日
整理・報告書作成期間	平成 28 年８月 29 日～平成 29 年３月 24 日

3　本書の原稿執筆はⅠを小峰　篤（前橋市教育委員会）、Ⅵを楢﨑修一郎（大妻女子大学博物館）、他を中村が担当した。

4　出土した人骨については楢﨑修一郎氏に鑑定して頂き、玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。

5　発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子　会田義之　青木和男　畦見恒男　新井實　飯島冬子　岩田覚　上沢公一　遠藤好則　太田英明
大竹哲夫　加藤知恵子　神坂慶三　鴨田榮作　今野妙子　佐藤文江　佐復進　須藤利雄　多田ひさ子
畠山勝利　樋口久雄　福島禄子　松島祐樹　宮澤博　森田恵子

6　本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。

7　下記の諸氏および機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

古平武夫　淺間陽　出浦崇　小此木真理　高橋清文　永井智教　野村満　山本千春　吉田智哉　日沖剛史
南田法正　山下歳信　山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3　遺構名称は、住居跡：H、溝跡：W、土坑墓：ＤＢ、土坑：D、ピット：Ｐである。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　住居跡・溝跡・土坑・ピット・その他・・・1/60　全体図・・・1/150
遺物　土器・石製品・・・1/3、1/4　金属製品・・・1/2

5　本文および表中の計測値については（　）は現存値を、〔　〕は復元値を表す。遺物の単位は cm、遺構の単位はm表す。

6　遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。

遺構　焼土範囲：　灰範囲：　硬化面範囲：　地山：
遺物　須恵器（還元焔）断面：　須恵器（酸化焔）断面：　研磨範囲：

7　主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間Ａテフラ：1783）、As-B（浅間Ｂテフラ：1108）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：６世紀中葉）、Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：６世紀初頭）、As-C（浅間Ｃテフラ：３世紀後半～４世紀中葉）

目　　次

巻頭図版１・２
はじめに
例言・凡例・目次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の方針と経過
　1　調査範囲と基本方針…… 7
　2　調査経過…… 7
Ⅳ　基本層序…… 9
Ⅴ　遺構と遺物
　（1）竪穴住居跡…… 9
　（2）溝跡…… 11
　（3）土坑、ピット…… 12
　（4）土坑墓…… 13
　（5）埋没谷…… 13
　（6）遺構外出土遺物…… 13
Ⅵ　自然科学分析
　（1）元総社蒼海遺跡群（121）ＤＢ－１号土坑墓出土古代人骨 …… 13
　（2）元総社蒼海遺跡群（121）出土獣骨 …… 14
Ⅶ　発掘調査の成果と課題…… 26

挿図目次

Fig.1　遺跡の位置 …… 1
Fig.2　周辺遺跡図 …… 3
Fig.3　周辺調査地点とグリッド設定図 …… 6
Fig.4　全体図 …… 8
Fig.5　基本層序 …… 9
Fig.6　ＤＢ－１号土坑墓人骨出土状況（南から） …… 14
Fig.7　Ｗ－３号溝跡出土馬骨：No.1・右橈骨尺骨後面観 …… 15
Fig.8　Ｗ－３号溝跡出土馬骨：No.2・左上腕骨前面観 …… 15
Fig.9　Ｗ－３号溝跡出土馬骨出土部位図 …… 15
Fig.10　Ｗ－４号溝跡出土ウシ（牛）出土部位図 …… 15
Fig.11　Ｗ－４号溝跡獣骨出土状況 …… 15
Fig.12　Ｗ－４号溝跡出土ウシ（牛）右下顎骨 …… 15
Fig.13　Ｈ－１号住居跡 …… 16
Fig.14　Ｈ－１号住居跡②、Ｈ－２号住居跡① …… 17
Fig.15　Ｈ－２号住居跡② …… 18
Fig.16　Ｈ－３号住居跡、Ｗ－１・２号溝跡 …… 19
Fig.17　Ｗ－３・４・６号溝跡、１号谷 …… 20
Fig.18　Ｗ－４・５号溝跡、１号谷 …… 21
Fig.19　土坑、土坑墓、ピット …… 22
Fig.20　Ｈ－１・２号住居跡、Ｗ－４・５号溝跡、ＤＢ－１号土坑墓出土遺物 …… 23
Fig.21　Ｗ－６号溝跡、１号谷、遺構外出土遺物 …… 24
Fig.22　Ｗ－４～６号溝跡と周辺調査例 …… 27

表目次

Tab.1　周辺遺跡一覧表…… 4
Tab.2　隣接調査地点の基本層序…… 8
Tab.3　元総社蒼海遺跡群（121）土坑、ピット計測表 …… 12
Tab.4　出土遺物観察表…… 24
Tab.5　関連溝跡一覧…… 26

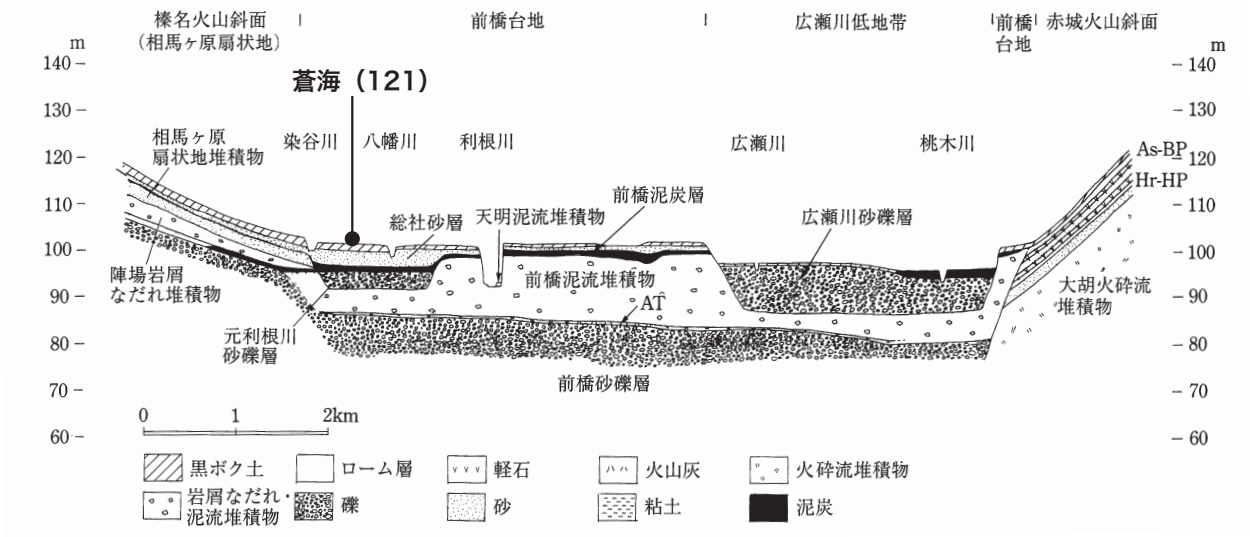
写真図版目次

PL.1　西側調査区全景（西から）　東側調査区全景（北西から）
PL.2　Ｈ－１全景（西から）　Ｈ－１カマド全景（西から）　Ｈ－１棚状施設全景（北西から）　Ｈ－１貯蔵穴全景（西から）　Ｈ－１カマド周辺部全景（西から）　Ｈ－１カマド掘り方全景（西から）　Ｈ－２全景（北から）　Ｈ－２カマド全景（西から）
PL.3　Ｈ－２貯蔵穴全景（西から）　Ｈ－２掘り方全景（北から）　Ｈ－２カマド掘り方全景（西から）　Ｈ－３全景（西から）　Ｈ－３カマド全景（西から）　Ｗ－３全景（北西から）　Ｗ－３獣骨No.１～３出土状況（南西から）　Ｗ－４全景（北東から）
PL.4　Ｗ－４・５間の遺構検出状況　土橋状に地山が残る（南東から）　Ｗ－５全景（南西から）　Ｗ－６遺物出土状況（南から）　DB－１遺物・人骨出土状況（南西から）　１号谷獣骨No.１～３出土状況（北西から）　１号谷獣骨No.３～７出土状況（南東から）　調査風景（北から）
PL.5　遺物写真

引用・参考文献

秋本太郎 2008「戦国城館の遺物」『後北条氏の城－合戦と支配－』　博物館周辺文化財の複合的活用事業実行委員会
阿久澤智和 2016「上野国府を探して～前橋市元総社町における発掘調査成果を中心として～」『発掘された古代の役所～最新の発掘調査からみた上野・北武蔵の律令社会～』　伊勢崎市教育委員会
五十嵐俊雄 2006『考古資料の岩石学』　パリノ・サーヴェイ株式会社
江口桂 2014「Ⅲ．地方官衙　4　国府」『古代官衙』考古調査ハンドブック 11　ニューサイエンス社
江口桂 2015『古代武蔵国府の成立と展開』　同成社
川原嘉久治 2011『上野国府跡』第１集　前編
木下晴一『古代日本の河川灌漑』　同成社
木津博明 1988「第３章　歴史的環境　第１節　周辺遺跡」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（３）』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
桐生直彦 2005『竈をもつ竪穴建物跡の研究』　六一書房
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『出土した古代の土器　展示レポート』
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『総社閑泉明神北Ⅳ遺跡・元総社牛池川遺跡・元総社北川遺跡・元総社小見内Ⅴ遺跡』
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７～19 世紀－』　京都編集工房
近藤義雄『天狗岩用水の研究』　群馬郡総社小学校　（出版年不詳）
坂口一 2013「第Ⅰ章　古墳時代の自然災害と遺跡　榛名山麓の火山災害（Hr-FA）」『自然災害と考古学』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年－住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討－」『群馬県史研究』24　群馬県史編さん委員会
坂本和俊 2015「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』第 50 号　埼玉考古学会
桜岡正信 1991「７世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について－群馬県地域を中心として－」『群馬考古学手帳』Vol.2　群馬土器観会
桜岡正信 2003「武蔵型甕について－上野地域の生産と流通－」『高崎市史研究』第 17 号　高崎市史編さん専門委員会
鈴木徳雄 1983「古代北武蔵における土師器製作手法の画期」『土曜考古』第７号　土曜考古学研究会
鈴木徳雄 1984「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態－古代武蔵国における土師器生産と交易－」　土曜考古学研究会
早田勉 1990「第一章　第五節　前橋台地と広瀬川低地帯」『群馬県史』通史編１　原始古代１　群馬県
早田勉 2000「5-3 関東平野北西部－山間・山麓部を流れる河川流域に見られる地形変化　（１）火山活動の影響を受けた利根川扇状地の地形」『関東・伊豆小笠原』日本の地形４　東京大学出版会
高橋直樹・大木淳一 2015『石ころ博士入門』　全国農村教育協会
田中信 2004「関東における在地土器食器」『中近世土器の基礎研究ＸＶⅢ　中世土器研究の今日的課題－土器編年と中世史研究－』　日本中世土器研究会
谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』　学生社
都丸十九一 1947『天狗岩堰開鑿史－江戸初期水利開發の一例－』群馬國語文化研究所
中村哲 2007『医者、用水路を拓く　アフガンの大地から世界の虚構に挑む』　石風社
奈良文化財研究所 2004『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編
日沖剛史 2016「群馬県前橋市元総社地域における地形の形成と土地利用」『地域考古学』１号　地域考古学研究会
東日本埋蔵文化財研究会・山梨県考古学協会 1998『治水・利水遺跡を考える－人は水とどのようにつきあってきたか－』第７回東日本埋蔵文化財研究会
深澤靖幸 2010「古代武蔵国府の成立」『府中市郷土の森博物館　紀要』第 23 号　府中市郷土の森博物館
深澤靖幸 2016「「国府のマチ」模型製作に関する覚書－古代武蔵国府の復元－」『府中市郷土の森博物館　紀要』第 29 号　府中市郷土の森博物館
府中市郷土の森博物館 2016『よみがえる古代武蔵国府』府中市郷土の森博物館ブックレット 17
前橋市教育委員会 2013『推定上野国府～平成 23 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2013『推定上野国府～平成 24 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2014『元総社蒼海遺跡群（57）・元総社蒼海遺跡群（58）・元総社蒼海遺跡群（59）』
前橋市教育委員会 2015『推定上野国府～平成 25 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2016『推定上野国府～平成 26 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2016『元総社蒼海遺跡群（100）・（101）』
前橋市教育委員会 2016『元総社蒼海遺跡群（117）・元総社蒼海遺跡群（118）』
前橋市教育委員会 2016『元総社蒼海遺跡群（120）』
前橋市教育委員会 2016『元総社蒼海遺跡群（93 街区）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2001『元総社小見内Ⅲ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2003『元総社小見Ⅴ遺跡　元総社小見内Ⅵ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006『元総社蒼海遺跡群（１）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006『元総社蒼海遺跡群（６）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2006『元総社蒼海遺跡群（７）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2008『元総社蒼海遺跡群（17）』
松田徳松・新井房夫 1971「第一編　第三節　自然の推移」『前橋市史』第一巻　前橋市
山野井徹『日本の土　地質学が明かす黒土と縄文文化』　築地書店
渡邊一弘 2000「天狗岩用水をめぐる町村」『群馬文化』264　群馬県地域文化研究協議会

※ 主要な文献以外は割愛した。



付図　高崎市棟高町～高崎市街地をへて前橋市荒口町に至る利根川扇状地の地質断面と遺跡の位置
（早田 1990　一部加筆）

Ⅰ　調査に至る経緯

平成 28 年５月９日付けで前橋市長　山　本　　龍（区画整理課）より元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に発掘調査を実施中であり、市教委直営による発掘調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務委託することで依頼者である前橋市と合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。平成 28 年６月 20 日付けで前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（121）」（遺跡コード：28A226）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、（121）は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

Fig.1　遺跡の位置

Ⅱ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置（Fig. １・２、付図）　元総社町は、前橋市の南西部に位置し、元総社蒼海遺跡群は、その北西域を占める。利根川を越えて約３km 東には群馬県庁をのぞみ、南約２km には本市の玄関口である前橋インターチェンジが所在する。遺跡地は 1960 年代まで主に畑地だったが、前橋市街地から広がる開発の波は元総社町にもおよび、蒼海遺跡群の東部と南部は宅地化が進んできた。さらに近年では、前橋－安中－富岡を結ぶ西毛広域幹線道路を中軸とする、元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって、市街地はさらに拡大しつつあり、遺跡地の周辺は今日、新旧の景観が混濁した過渡的な様相の中にある。

遺跡地は、榛名山南東麓に伸びる相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にあり、牛池川と染谷川の合流点で画された、南北に長い台地上に立地する。約２万年前、浅間山は山体崩落を起こし、前橋泥流が生じた。十数メートルも堆積した泥流層は前橋台地の母体となり、その表層には川が流れた。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の総社や元総社の辺りを流れていたと考えられている（早田 1990）。約 1.7 万年前、榛名山の山体崩落によって陣場岩屑なだれが発生し、その堆積物が相馬ヶ原扇状地の母体となった。約 1.4 ～ 1.3 万年前を前後する頃には前橋泥炭層が形成され、遺跡地の周辺は針葉樹林や草本類が繁茂する環境下にあったと考えられている（早田 2000）。相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの中小河川は榛名山の裾野を南東へ流れるが、元利根川が残した低地の影響を受け、ちょうど遺跡地の辺りで流れを大きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層が堆積した結果、遺跡地の周辺には約 2.5 mの深さにも及ぶ総社砂層が形成されたと考えられている（日沖 2016）。総社砂層の堆積と中小河川の開析作用の反復は、わずかな高台と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ち着いて、今日に至るまで下刻を続けている。台地の上部には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度重なる火山災害や人為的な

地形改変の累積を経て、台地表層は次第に平坦化してきたと推測できる。

歴史的環境（Fig. 2・3、Tab. 1）　紙数の都合上、国府周辺地域を見据えた広域的な叙述は既存の報告書にたのみ、ここでは、本遺跡の様相に合わせて地域を限定し、記載する。

総社砂層より上層で確認される最も古い遺構は現在のところ、縄文時代前期に遡る。遺構の覆土には黒ボク土が混ざることから、台地上に黒ボク土が形成されたのは、この頃と考えられる。該期の住居跡は、蒼海遺跡群（3・4・13・40・41 ※以下「蒼海」）・小見Ⅴ～Ⅶ遺跡などで確認され、現状では、染谷川左岸の自然堤防に沿って帯状に分布する。続く中期の住居跡は、蒼海（3・40）・小見内Ⅶ遺跡などに確認される。蒼海（10）を除くこの一帯は、染谷川自然堤防の北端と、榛名山南東裾の最末端にあたり、緩やかな南斜面で、広い微高地を面的に確保できる地帯である。後期～晩期の遺構は少ないが蒼海（10・101）に確認され、遺物は蒼海（100）・小見Ⅴ遺跡などにも確認される。中期からの微高地上に加え、台地内の谷地に立地する蒼海（101）にも、この時期の遺構が分布する。小見Ⅴ遺跡は染谷川、蒼海（10・100）は牛池川の低地に立地し、蒼海（101）に隣接する本遺跡では、わずかながら前期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は少ないが、前期末～後期の遺物は、蒼海（37・39・61）・小見内Ⅲ遺跡などで出土しており、現状の分布は台地の北端をなす牛池川右岸の一帯に集中する。牛池川の低地平野を北に望む立地だが、低地内の元総社北川遺跡や元総社牛池川遺跡では、遺物は出土するものの、水田跡などの生産域は確認されていない。

古墳時代前期の遺構は、ひとつには蒼海（38・39・17 街区）・小見内Ⅲ遺跡のように、弥生時代後期の分布を踏襲する。また、蒼海（40・48）・小見Ⅴ遺跡など染谷川の自然堤防上と、蒼海（38・56・61）など牛池川左岸の一帯にも住居跡が分布する。牛池川左岸の一帯では集落域のほか、低地平野に立地する閑泉明神北Ⅳ・Ⅴ遺跡で水田跡が確認され、蒼海（62・81・100）などには周溝墓と推定される溝跡が確認されており、該期における集落域・生産域・墓域を含む、一体的な生活の単位が確認されつつある。中期になると、牛池川の一帯では左岸を中心に遺跡が分布し、蒼海（35・81・91）・甲稲荷大道西Ⅱ遺跡・元総社中学校遺跡などで、多くの住居跡が確認される。元総社北川遺跡・閑泉明神北Ⅳ・Ⅴ遺跡など、低地内の遺跡では Hr-FA 洪水層に覆われた小区画水田跡が確認されており、この頃までには、牛池川低地平野の広い範囲が生産域として開拓されていたと推測できる。後期になると遺跡は増え、蒼海遺跡群のほぼ全域で住居跡が確認されている。しかしながら該期の古墳は確認されておらず、蒼海（10・23・28）などで埴輪片が出土した程度である。やや離れて約 1 km 東に稲荷山古墳［43］が位置し、直径約 30 m程度の円墳で、6 世紀後半頃の築造と考えられている。7 世紀になると、約 2 km 北に、総社古墳群を代表する愛宕山古墳［ロ］・宝塔山古墳［ハ］・蛇穴山古墳［ニ］の大型方墳や山王廃寺［ホ］が建立されて、政治的中枢を形成する。本遺跡の周辺では、蒼海（9・10・35）で、建物の方向が一定の規則性を示す、大規模な掘立柱建物跡群が確認されている。7 世紀の住居跡は、周辺に広く分布するが、前段階に比べると減少し、現状では数軒単位の小規模な群構成が点在するように見える。本遺跡では、該期に開削された大規模な溝跡と住居跡を調査した。

奈良時代、本遺跡の周辺は推定上野国府域にあたり、国庁の位置には A ～ D の 4 案が推定されている。その内、宮鍋神社南面の国庁 C 案推定地やその周辺では、蒼海（99）・上野国府等範囲内容確認調査 28・33・34 トレンチで掘込地業をもつ建物跡が確認され、蒼海（95）では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。一方、この域内では 8 世紀後半から 9 世紀末葉まで、現状で住居跡は確認されていない。国府域の特殊性は周辺遺跡の出土遺物にも反映され、内面に放射状暗文を施す土師器暗文坏や、須恵器盤・高盤の出土率は他の地域に比べて高く、蒼海（22・40・41）・小見Ⅵ遺跡など 30 地点以上に出土例があり、蒼海（13・41）では三彩陶器、蒼海（1・38・40）では腰帯具、蒼海（26・60）では円面硯なども該期の遺構から出土している。本遺跡では、前代から続く大規模な溝跡を調査した。

平安時代になると、前代にも増して、各遺跡に中小規模の住居跡が数多く確認される。国庁や曹司によって構

成される国衙、国司館や市・津、それらの機能を支えた徭丁が一時滞留する宿所的集落など、上野国府域の空間構成の検討は、歴史地理学的な手法によるところが大きかったが、近年では発掘調査の進展によって、域内における地点ごとの考古学的な差異が、おぼろげながら把握されつつある。例えば、国府域の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41）、小見Ⅱ遺跡などには、住居跡が高い密度で分布する。この地点は、腰帯具・円面硯の出土率が高く、鉄鉢形土器・三足盤・金の付着した灰釉陶器などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書土器が出土している。また、国府域の西端にあたる染谷川左岸の自然堤防上は、緑釉陶器の出土が多い国府域の中でも、特に高い出土率を示す一帯で、蒼海（８・13）では合計49点もの破片が出土している。なお、国府域の北東端にあたる牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでも、特に多くの住居跡が確認され、馬具・小札・刀装具・鉄鏃など武器・武具の出土が目立つ。国府に関連すると考えられる区画溝は、蒼海（２・７・９・13・36・58）、閑泉樋遺跡などで確認されている。本遺跡では、該期に再掘削された大規模な溝跡を調査した。平安時代中期、国府域は平将門の乱の舞台となった。将門は天慶２年（939年）に国衙を攻略するが、これに関わる考古資料は、現在のところ確認されていない。

国府域の空間構成復元を困難としている要因の一つとして、蒼海城［ｉ］の大規模な地形改変がある。国庁推定地内に位置する、蒼海（23・29・65）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸に展開する無数の柱穴群が確認され、その帰属時期は15世紀を中心とする。蒼海城に関連する遺物としては、蒼海（23・25）で、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。室町時代、関東管領を世襲する上野国守護の上杉氏より、守護代に任命された総社長尾氏は、往時に「総社城」と呼ばれたこの城を本拠とした。

慶長６年（1601年）、秋元長朝が総社領主になると蒼海城は廃城となり、総社城［ⅱ］が築城された。長朝は戦乱で荒廃した総社領を復興するために灌漑体系の整備を行い、天狗岩用水［ａ］を開削した。天狗岩用水を基幹とする水路網の整備によって領内の新田開発は進み、六千石程度だった石高は、開削が成った慶長９年（1604年）頃には、一万石に達したと言われる。天狗岩用水の水路網は、五千石堰用水［ｂ］や小笠原堰用水［ｃ］によって補われるが、これらの用水路は一方で、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする午王頭川や八幡川の中小河川から取水し、現利根川から取水する天狗岩用水とは、異なる灌漑体系をもつ。その開削の時期は天狗岩用水を遡る可能性が指摘されており、上野国神名帳に残る「小笠原溝口明神」の記載は、小笠原堰用水を示すと考えら

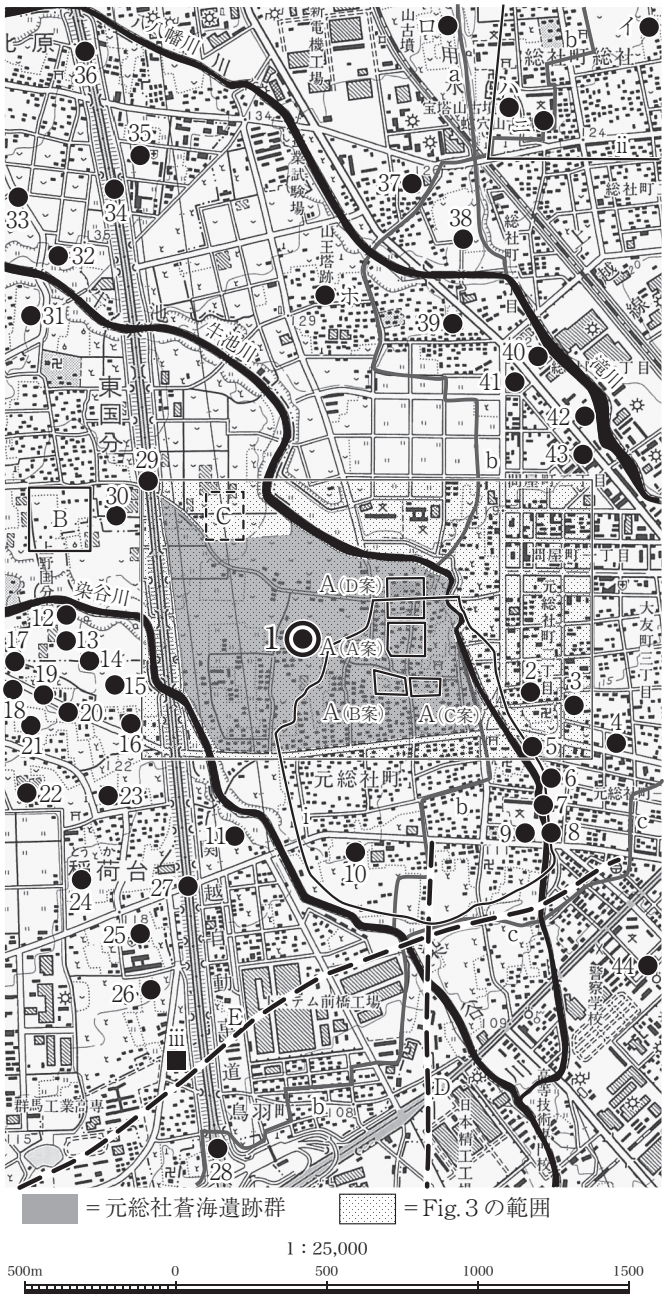


Fig.２　周辺遺跡図

Tab. 1　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	**元総社蒼海遺跡群（121）**	16	塚田村東遺跡	31	西国分薬師廻り遺跡	ロ	愛宕山古墳
2	屋敷・屋敷Ⅱ遺跡	17	引間松葉遺跡Ⅲ区	32	国分境Ⅲ遺跡	ハ	宝塔山古墳・総社町屋敷南遺跡
3	堰越Ⅱ遺跡	18	塚田中原遺跡	33	西国分Ⅱ遺跡	ニ	蛇穴山古墳
4	堤越遺跡	19	塚田中原遺跡Ｏ区	34	国分境遺跡	ホ	山王廃寺跡
5	大友屋敷Ⅱ・大友屋敷Ⅲ遺跡	20	塚田村東Ⅳ遺跡	35	北原一町畑Ⅲ遺跡	A	上野国庁推定地（Ａ～Ｄ案）
6	元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅹ	21	塚田村東Ⅲ遺跡	36	北原遺跡	B	上野国分僧寺
7	元総社寺田遺跡Ⅰ～Ⅲ	22	塚田村前遺跡	37	村東遺跡	C	上野国分尼寺
8	寺田遺跡	23	塚田村東Ⅱ・稲荷台村北遺跡	38	大屋敷遺跡Ⅰ～Ⅳ	D	日高道推定地
9	元総社小学校校庭遺跡	24	稲荷台村南遺跡	39	昌楽寺廻向・昌楽寺廻向Ⅱ遺跡	E	東山道駅路国府ルート推定地
10	天神・天神Ⅱ遺跡	25	稲荷台・北金尾遺跡	40	産業道路東遺跡	i	蒼海城跡
11	弥勒・弥勒Ⅱ遺跡	26	稲荷台東金尾境遺跡	41	産業道路西遺跡	ii	総社城跡
12	元総社西川遺跡	27	鳥羽遺跡	42	稲荷塚道東遺跡	iii	金尾城跡
13	上野国分寺参道遺跡	28	中尾遺跡	43	稲荷山古墳	a	天狗岩用水
14	元総社西川・塚田中原遺跡	29	上野国分僧寺・尼寺中間地域	44	元総社稲葉遺跡	b	五千石堰用水
15	塚田中原遺跡	30	上野国分二寺中間地域遺跡	イ	遠見山古墳	c	小笠原堰用水

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
－	元総社蒼海遺跡群（１）	2005	**古墳～平安**：住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構ヵ、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇縄文土器（前期）・緑釉・灰釉・盤・こね鉢・鉄鏃・鉄鋲・腰帯具・権ヵ
－	元総社蒼海遺跡群（２）	2005	**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構・大溝・土坑墓、**中世以降**：土坑墓・道路状遺構　◇灰釉・盤・高盤・鉄鏃・埴輪
－	元総社蒼海遺跡群（３）・元総社小見Ⅶ遺跡	2005	**縄文**：住居跡、**古墳・奈良・平安**：住居跡・掘立柱建物跡・道路状遺構、**中世**：畠跡　◇縄文土器（前～後期）・灰釉・円面硯・権ヵ・紡錘車・墨書「墓」・土錘
－	元総社蒼海遺跡群（４）	2005	**縄文**：住居跡、**古墳・奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・盤・鉄鉢形土器・飾金具・墨書「連」ヵ・紡錘車・土錘・臼玉・石製模造品
－	元総社蒼海遺跡群（５）	2005	**古墳**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡、**中世**：道路状遺構・周溝状遺構・土坑墓・火葬墓　◇暗文坏・板碑・管玉・臼玉
－	元総社蒼海遺跡群（６）	2005	**古墳**：砂岩採掘坑、**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構・鍛冶遺構・区画溝、**中世**：堀跡（蒼海城）・土坑墓　◇灰釉・鉄鏃
－	元総社蒼海遺跡群（７）	2005	**平安**：住居跡・大溝・砂岩採掘坑、**中世**：大溝　◇灰釉・羽口・埴輪
－	元総社蒼海遺跡群（８）	2006	**古墳・奈良・平安**：住居跡、**中世以降**：道路状遺構　◇緑釉・灰釉・三足土器・灯明具・鉄鏃・鉄鍋・勾玉
－	元総社蒼海遺跡群（９）（10）	2006	**縄文**：住居跡、**古墳**：住居跡・竪穴状遺構、**飛鳥**：住居跡・掘立柱建物跡・大溝、**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構・大溝・砂岩採掘坑　◇縄文土器（中期～晩期）・弥生土器（中期）・灰釉・鉄鏃・小札・鉄鎌・紡錘車・土錘・石製模造品・埴輪
－	元総社蒼海遺跡群（11）	2006	**古墳～平安**：住居跡・竪穴状遺構、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・暗文坏・土錘・勾玉・臼玉
－	元総社蒼海遺跡群（12）	2006	**古墳・奈良・平安**：住居跡、**中世以降**：土坑墓　◇灰釉・暗文坏・鉄鏃
－	元総社蒼海遺跡群（13）	2008	**縄文**：住居跡、**古墳・飛鳥**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・工房跡・道路状遺構・大溝、**中世**：土坑墓　◇縄文土器（前期）・緑釉・灰釉・馬具・鉄鏃・鉄釜ヵ・紡錘車・鬼瓦
－	元総社蒼海遺跡群（14）	2008	**古墳**：住居跡・水田跡・畠跡、**飛鳥**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・掘立柱建物跡、**中世**：堀跡（蒼海城）・竪穴状遺構　◇灰釉・暗文坏　［国庁Ａ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（15）	2008	**奈良・平安**：住居跡、**中世**：土坑墓　◇灰釉・灯明具
－	元総社蒼海遺跡群（16）	2008	**奈良・平安**：住居跡・畠跡　◇灰釉・盤
－	元総社蒼海遺跡群（17）	2008	**古墳**：住居跡・竪穴状遺構・区画溝、**平安**：住居跡、**中世**：土坑墓　◇縄文土器（前期）・弥生土器（後期）・灰釉・灯明具
－	元総社蒼海遺跡群（18）	2008	**平安**：住居跡、**中世以降**：土坑墓　◇灰釉・盤・鉗子ヵ・青磁（12c）
－	元総社蒼海遺跡群（19）	2008	**古墳**：水田跡　◇木製舟形容器
－	元総社蒼海遺跡群（20）	2008	**古墳・飛鳥**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構・道路状遺構、**中世**：土坑墓　◇縄文土器（前～後期）・灰釉陶器・盤・須恵器「壺Ｇ」・暗文坏・灯明具・鉄鏃・鉄鎌・腰帯具・鬼瓦　［国庁Ａ案推定域、国分尼寺南辺含む］
－	元総社蒼海遺跡群（21）	2009	**奈良・平安**：大溝、**中世**：堀跡（蒼海城）・盛土状遺構・方形竪穴　◇灰釉・白磁（12c）・青磁（15c）　［国庁Ｂ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（22）	2009	**古墳・飛鳥**：住居跡、**平安**：住居跡・竪穴状遺構・道路状遺構ヵ　◇灰釉・暗文坏・洗（大形盤）ヵ・灯明具・鉄鍵
－	元総社蒼海遺跡群（23）	2009	**古墳・飛鳥**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・大溝、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇白磁（15c）・青磁（13～15c）・天目茶碗　［国庁Ｂ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（24）	2009	**縄文**：住居跡、**古墳・飛鳥**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構、**中世**：方形竪穴・道路状遺構　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・盤・竈形土製品・腰帯具・鉄鏃・紡錘車・土錘・青磁（14c）
－	元総社蒼海遺跡群（25）	2009	**古墳・平安**：住居跡　◇灰釉・鉄鏃・青白磁梅瓶（12～14c）　［国庁Ａ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（26）	2009	**飛鳥・奈良**：住居跡、**平安**：住居跡・竪穴状遺構、土坑墓、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇緑釉・灰釉・円面硯・盤・高盤・暗文坏・紡錘車・鉄鏃・腰帯具・土錘・墨書「大舘」
－	元総社蒼海遺跡群（27）	2009	**古墳**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構、**中世**：堀跡（蒼海城）・方形竪穴　◇縄文土器（前～晩期）・弥生土器（後期）・灰釉・盤・洗ヵ・灯明具・鉄鏃・埴輪
－	元総社蒼海遺跡群（28）	2009	**古墳**：住居跡・大溝、**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構、**中世**：堀跡（蒼海城）・方形竪穴　◇縄文土器（前～晩期）・弥生土器（後期）・灰釉・盤・鉄鏃・馬具・紡錘車・羽口・埴輪
－	元総社蒼海遺跡群（29）	2009	**古墳～平安**：住居跡、**中世以降**：堀跡（蒼海城）・掘立柱建物跡・地下式坑・土坑墓・火葬跡　◇灰釉・鉄鏃・鉄滓　［国庁Ｂ・Ｃ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（30）	2009	**古墳・平安**：住居跡、**中世**：堀跡（蒼海城）・道路状遺構・土坑墓・火葬跡　◇縄文土器（前・中期）・鉄鏃
－	元総社蒼海遺跡群（31）	2009	**古墳**：住居跡、**中世**：堀跡（蒼海城）、**時期不明**：道路状遺構　◇土錘・埴輪　［国庁Ａ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（32）	2010	**古墳**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡、**中世**：堀跡（蒼海城）・竪穴状遺構　◇縄文土器（前期）・灰釉・鉄鏃　［国庁Ｄ案推定域含む］
－	元総社蒼海遺跡群（33）	2010	**古墳**：粘土採掘坑、**飛鳥・奈良**：住居跡、**平安**：住居跡・大溝ヵ・土坑墓　**中世**：堀跡（蒼海城）・方形竪穴・土坑墓　◇高盤・こね鉢・鉄鉢形土器
－	元総社蒼海遺跡群（34）	2010	**奈良・平安**：住居跡、**中世以降**：堀跡（蒼海城）・竪穴状遺構　◇灰釉・暗文坏・羽口・紡錘車
－	元総社蒼海遺跡群（35）	2010	**縄文**：住居跡、**古墳・飛鳥**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・布掘掘立柱建物跡・掘立柱建物跡、**中世**：堀跡（蒼海城）・土坑墓　◇縄文土器（前期）・灰釉・高盤・盤・畿内産暗文坏・鉄斧・鉄鑿ヵ・紡錘車
－	元総社蒼海遺跡群（36）	2010	**古墳**：畠跡、**平安**：住居跡・水田跡・大溝・砂岩採掘坑、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・盤・灯明具・鉄鏃・埴輪・板碑　［国庁Ｂ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（37）	2011	**古墳・飛鳥**：住居跡、**平安**：住居跡・竪穴状遺構・土坑墓、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇縄文土器（後期）・弥生土器（後期）・灰釉・こね鉢・灯明具・権ヵ・鉄鏃・弓筈ヵ・馬具・羽口・鉄滓・炉壁・紡錘車・土錘・耳環・臼玉・石製模造品　［国庁Ａ・Ｄ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（38）	2012	**古墳**：住居跡・竪穴状遺構・砂岩採掘坑・前方後方形周溝墓ヵ・土器集積・水田跡、**奈良・平安**：住居跡・掘立柱建物跡・大溝・道路状遺構、**中世以降**：堀跡（蒼海城）・大溝　◇灰釉・高盤・灯明具・腰帯具・鉄鏃・銅鈴・鉄鍵・土錘　［国庁Ａ・Ｄ案推定域含む］
－	元総社蒼海遺跡群（39）	2012	**古墳**：住居跡、**平安**：住居跡・土坑墓、**中世以降**：大溝　◇弥生土器（前～中期）・灰釉・獣脚土器・灯明具・鉄鏃・鉗子ヵ・小札・刀装具・馬具・腰帯具・鉄鍵・羽口・紡錘車・土錘・切子玉・臼玉　［国庁Ｄ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（40）	2013	**縄文**：住居跡、**古墳・飛鳥**：住居跡・竪穴状遺構、**奈良・平安**：住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶遺構・道路状遺構　◇縄文土器（前～後期）・灰釉・盤・円面硯ヵ・鉄鏃・腰帯具・紡錘車
－	元総社蒼海遺跡群（41）	2013	**縄文**：住居跡、**古墳**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡・鍛冶遺構、**中世**：掘立柱建物跡・道路状遺構　◇縄文土器（前期）・青磁・奈良三彩・緑釉・灰釉（金付着）・盤・鉄鉢形土器・暗文坏・円面硯・須恵器「壺Ｇ」・灯明具・鉄鏃・鉄鉗・腰帯具・羽口・紡錘車・臼玉・刻書「☆（五芒星）」・墨書「金」
－	元総社蒼海遺跡群（42）	2013	（遺構なし）
－	元総社蒼海遺跡群（43）	2013	**奈良・平安**：住居跡、**中世**：道路状遺構　◇高盤
－	元総社蒼海遺跡群（44）	2013	**奈良・平安**：住居跡、**中世**：堀跡（蒼海城）
－	元総社蒼海遺跡群（45）	2013	**古墳・平安**：住居跡、**中世**：堀跡（蒼海城）・地下式坑　◇三足土器・鉄滓・羽口　［国庁Ｃ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（46）	2013	**平安**：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（47）	2013	**中世**：堀跡（蒼海城）・柱列跡
－	元総社蒼海遺跡群（48）	2013	**縄文**：住居跡、**古墳～奈良**：住居跡、**平安**：住居跡・竪穴状遺構・埋没谷　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・高盤・盤・暗文坏・鉄鏃・鉄鎌・鉄鋤・鉄滓・紡錘車・臼玉
－	元総社蒼海遺跡群（49）	2013	**平安**：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（50）	2013	**縄文**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡　◇灰釉
－	元総社蒼海遺跡群（51）	2013	**古墳・奈良**：住居跡　◇盤・暗文坏
－	元総社蒼海遺跡群（52）	2013	（遺構なし）
－	元総社蒼海遺跡群（53）	2013	**古墳～平安**：住居跡　◇灰釉・灯明具・紡錘車・石製模造品　［国庁Ｄ案推定域］
－	元総社蒼海遺跡群（54）	2013	（遺構なし）
－	元総社蒼海遺跡群（55）	2013	**奈良**：住居跡
－	元総社蒼海遺跡群（56）（61）	2013	**古墳**：方形周溝墓・住居跡・竪穴状遺構、**奈良・平安**：住居跡　◇縄文土器（前・中期）・弥生土器（後期）・紡錘車

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
−	元総社蒼海遺跡群（57）	2014	中世：堀跡（蒼海城）　◇高盤・馬骨・青磁（15 ～ 16c）　［国庁Ｂ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（58）	2014	平安：大溝、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・温石　［国庁Ｂ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（59）	2014	平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴
−	元総社蒼海遺跡群（60）	2014	古墳：住居跡、飛鳥：大溝、平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇緑釉・灰釉（朱墨転用硯）・盤・円面硯・刀装具・鉄滓
−	元総社蒼海遺跡群（62）	2014	古墳：周溝墓
−	元総社蒼海遺跡群（63）	2014	古墳・平安：住居跡　◇紡錘車・管玉・臼玉
−	元総社蒼海遺跡群（64）	2014	奈良ヵ：製鉄炉、平安：住居跡、中世：方形竪穴・土坑墓　◇鉄滓・炉壁　［国庁Ａ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（65）	2014	古墳・平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉　［国庁Ｃ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（66）	2013	古墳：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）
−	元総社蒼海遺跡群（67）	2013	古墳：住居跡
−	元総社蒼海遺跡群（68）	2013	奈良：住居跡、中世以降：方形竪穴
−	元総社蒼海遺跡群（72）	2013	平安：住居跡　◇灰釉
−	元総社蒼海遺跡群（73）	2013	時期不明：道路状遺構
−	元総社蒼海遺跡群（81）	2014	古墳：方形周溝墓・住居跡、飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構　◇紡錘車・管玉・臼玉・石製模造品
−	元総社蒼海遺跡群（82）	2014	古墳・平安：住居跡
−	元総社蒼海遺跡群（83）	2014	（遺構僅か）
−	元総社蒼海遺跡群（84）	2014	飛鳥：住居跡　◇高盤
−	元総社蒼海遺跡群（85）	2014	飛鳥～平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇緑釉・灰釉・羽口
−	元総社蒼海遺跡群（88）	2014	時期不明：畠跡
−	元総社蒼海遺跡群（89）	2014	中世：竪穴状遺構
−	元総社蒼海遺跡群（90）	2014	中世：竪穴状遺構
−	元総社蒼海遺跡群（91）	2014	古墳～平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・盤・金銅小仏
−	元総社蒼海遺跡群（95）	2014	古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・大溝　◇灰釉・灯明具　［国庁Ｃ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（96）	2014	（遺構なし）　［国庁Ｃ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（97）	2014	平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・灯明具・馬具
−	元総社蒼海遺跡群（98）	2014	中世：掘立柱建物跡　［国庁Ｃ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（99）・ 上野国府等範囲内容確認調査 33・34 トレンチ	2015	奈良・平安：掘込地業建物跡　［国庁Ｃ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（100）	2014	古墳：周溝墓、飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：掘立柱建物跡・道路状遺構　◇縄文土器（晩期）　灰釉・鉄滓・埴輪
−	元総社蒼海遺跡群（101）	2014	縄文：竪穴状遺構・土坑墓、飛鳥・奈良：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓、中世：堀跡（蒼海城）・掘立柱建物跡 ◇縄文土器（後期）・灰釉・槍鉋ヵ
−	元総社蒼海遺跡群（102）	2015	中世：堀跡　◇灯明具　［国庁Ｂ案推定域］
−	元総社蒼海遺跡群（103）	2015	縄文：住居跡、古墳～平安：住居跡　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・盤状坏・灯明具・「有鍔台付鉢」
−	元総社蒼海遺跡群（117）	2016	飛鳥：住居跡、奈良・平安：区画溝
−	元総社蒼海遺跡群（118）	2016	平安：住居跡・土坑墓、中世以降：粘土採掘坑　◇灰釉・国分寺鬼瓦・鉄鏃
−	元総社蒼海遺跡群（120）	2016	平安：掘立柱建物跡　◇縄文土器（前期）
−	元総社蒼海遺跡群（121）	2016	飛鳥：住居跡・区画溝、奈良・平安：区画溝・土坑墓　◇貝巣穴痕軟質泥岩
−	元総社蒼海遺跡群（17 街区）	2015	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・道路状遺構、中世：土坑墓・火葬跡　◇こね鉢ヵ・板碑
−	元総社蒼海遺跡群（93 街区）	2016	古墳：畠・粘土採掘坑、奈良・平安：住居跡・粘土採掘坑、中世：堀跡（蒼海城）・掘立柱建物跡　◇縄文土器（中・後期）・灰釉・暗文坏・転用硯・紡錘車・鉄滓
−	元総社小見遺跡	2000	縄文・古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・道路状遺構　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・水瓶・円面硯・馬具・鉄鏃・紡錘車・臼玉
−	元総社小見Ⅱ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：道路状遺構　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・三足盤・双耳坏・灯明具・鉄鏃・鉄斧・鉗子・墨書「市」・紡錘車・臼玉
−	元総社小見Ⅲ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世以降：堀跡（蒼海城）・道路状遺構・土坑墓　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・暗文坏・国分寺鬼瓦・耳環・臼玉
−	元総社小見Ⅳ遺跡	2003	縄文・古墳～平安：住居跡、中世：道路跡　◇縄文土器（中期）・灰釉・灯明具・鉄鏃・弓筈ヵ・紡錘車・土錘
−	元総社小見Ⅴ遺跡	2003	縄文：住居跡、古墳・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：畠跡　◇縄文土器（前～後期）・灰釉
−	元総社小見Ⅵ遺跡	2004	縄文・古墳～平安：住居跡　◇縄文土器（前・中期）・緑釉・灰釉・水瓶・鉄鏃・鉄斧・鉄鋤・鉄鎌・腰帯具・紡錘車・権ヵ・墨書「庄」
−	元総社小見内Ⅲ遺跡	2001	弥生：住居跡、古墳：住居跡・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構・土坑墓、中世：掘立柱建物跡・方形竪穴・堀跡（蒼海城）・道路状遺構・土坑墓・火葬墓　◇縄文土器（中期）・弥生土器（中期）・緑釉・灰釉・盤・こね鉢・暗文坏・風字硯・鉄鏃・火打金・鉗子・飾金具・腰帯具・竈形土製品・臼玉
−	元総社小見内Ⅳ遺跡	2002	飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・道路状遺構・周溝状遺構、中世：堀跡（蒼海城）・土坑墓　◇灰釉・盤・こね鉢
−	元総社小見内Ⅵ遺跡	2003	飛鳥：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構・砂岩採掘坑、中世：掘立柱建物跡　◇灰釉・須恵器「壺Ｇ」・鉄鏃・臼玉
−	元総社小見内Ⅶ遺跡	2003	縄文：住居跡、飛鳥：住居跡、奈良・平安：大溝　◇縄文土器（中期）・盤
−	元総社小見内Ⅷ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡、中世：方形竪穴　◇高盤・こね鉢・暗文坏
−	元総社小見内Ⅸ遺跡	2004	奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構・土器埋納坑　◇灰釉・盤・灯明具・鉄鏃・紡錘車
−	元総社小見内Ⅹ遺跡	2004	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・工房跡・粘土採掘坑、中世：堀跡（蒼海城）・土坑墓・火葬跡・道路状遺構　◇縄文土器（晩期）・灰釉・金片・金粒
−	元総社草作遺跡	1984	飛鳥～平安：住居跡　◇縄文土器（中期）・高盤・腰帯具・白磁（15c）・青磁（13c）
−	元総社草作Ⅴ遺跡	2002	古墳～平安：住居跡・粘土採掘坑、中世以降：堀跡（蒼海城）・土坑墓・火葬跡　◇白磁（11c ～ 12c）・鉄鏃・臼玉
−	元総社宅地遺跡１～８トレンチ	2000	古墳・平安：住居跡　◇紡錘車　［国庁Ｄ案推定域］
−	元総社宅地遺跡９～ 18・21 トレンチ	2000	中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴　［国庁Ｂ案推定域］
−	元総社宅地遺跡 19 トレンチ	2000	中世：堀跡（蒼海城）　［国庁Ｃ案推定域］
−	元総社宅地遺跡 20 トレンチ	2000	（遺構僅か）　［国庁Ａ案推定域］
−	元総社宅地遺跡 22・23 トレンチ・ 上野国府等範囲内容確認調査 13 トレンチ	2000・2012	古墳：住居跡、飛鳥～平安：住居跡（平安）・掘立柱建物跡（奈良）・大溝・道路状遺構　◇獣脚土器
−	上野国府等範囲内容確認調査１～７トレンチ	2011	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡（平安）・大溝・道路状遺構　［国庁Ａ案推定域］
−	上野国府等範囲内容確認調査 ８～ 11・13・14・28 トレンチ	2012	古墳：住居跡、奈良（8c 前半）：住居跡、奈良～平安：住居跡・掘込地業建物跡　◇石製模造品　［国庁Ｃ案推定域］
−	上野国府等範囲内容確認調査 12 トレンチ	2012	古墳・平安：住居跡
−	上野国府等範囲内容確認調査 27 トレンチ	2016	平安：住居跡　◇緑釉・灰釉
−	上野国府等範囲内容確認調査 28 トレンチ	2016	古墳：住居跡、奈良：掘込地業建物跡、平安：住居跡・掘込地業建物跡　◇銅滓
−	上野国府等範囲内容確認調査 29 トレンチ	2016	奈良・平安：大溝、中世：堀跡（蒼海城）　◇墨書「夫」ヵ
−	上野国府等範囲内容確認調査 40 トレンチ	2017	奈良・平安：大溝
−	上野国分尼寺（上野国分尼寺寺域確認調査）	1969・1970・ 1999・2000	奈良：講堂跡・金堂跡・中門跡・東門跡・築地塀跡・住居跡、平安：住居跡
−	総社甲稲荷塚大道西遺跡	2001	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・用水路ヵ、中世：畠跡　◇緑釉・灰釉・勾玉・管玉
−	総社甲稲荷塚大道西Ⅱ遺跡	2001	古墳：住居跡、平安：住居跡　◇緑釉・灰釉・銅鉢・紡錘車・管玉・鉄滓
−	総社甲稲荷塚大道西Ⅲ遺跡	2002	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・畠跡　◇緑釉・灰釉・石製模造品・紡錘車
−	総社甲稲荷塚大道西Ⅳ遺跡	2003	古墳：畠跡、中世以降：道路状遺構・畠跡
−	総社閑泉明神北遺跡	1999	古墳：水田跡・畠跡　◇縄文土器（前～晩期）・灰釉・鉄滓・勾玉
−	総社閑泉明神北Ⅱ遺跡	2001	古墳・平安：住居跡　◇灰釉・管玉
−	総社閑泉明神北Ⅲ遺跡	2002	縄文・古墳～平安：住居跡　◇灯明具
−	総社閑泉明神北Ⅳ遺跡	2002 ～ 2004	古墳：水田跡・畠跡
−	総社閑泉明神北Ⅴ遺跡	2004	古墳：水田跡、奈良・平安：住居跡
−	閑泉樋遺跡	1983	古墳：住居跡、奈良・平安：大溝
−	閑泉樋南遺跡	1985	古墳：住居跡　◇紡錘車
−	元総社北川遺跡	2002 ～ 04	縄文～弥生：旧河道、古墳：住居跡・水田跡・粘土採掘坑・旧河道、平安：住居跡・掘立柱建物跡・畠跡、中世以降：掘立柱建物跡・水田跡・火葬墓　◇縄文土器（晩期）・弥生土器（後期）・灰釉・盤・暗文坏
−	元総社牛池川遺跡	2002 ～ 04	古墳：水田跡・土器集積遺構、中世：火葬跡

番号	遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・出土遺物
－	元総社中学校遺跡	2016	古墳：住居跡、奈良：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡　◇縄文土器（前・晩期）・緑釉・灰釉・鉄鉢形土器・三足土器・竈形土製品・「方光」銘瓦・臼玉

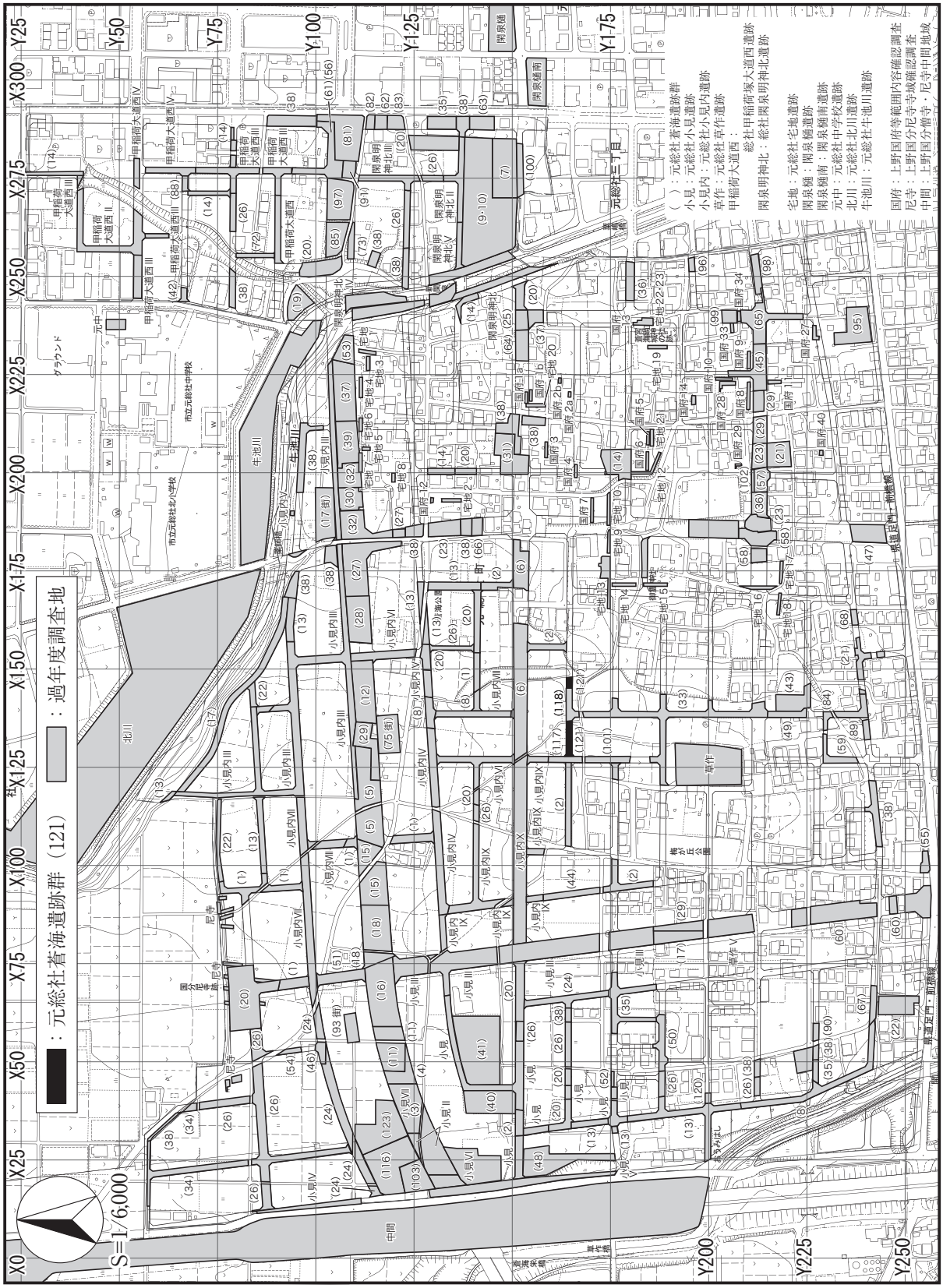


Fig. 3　周辺調査地点とグリッド設定図

れている（都丸 1943、近藤［出版年不詳］）。また、つい最近暗渠化してしまったが、五千石堰用水の左岸にあたる甲稲荷塚大道西遺跡のＡ区では、五千石堰用水と同一方向に流下する、11 世紀以前に埋没した大規模な溝跡が確認されている。

Ⅲ　調査の方針と経過

1　調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地であり、調査面積は、247 ㎡である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第Ⅸ系）X = 44000.000、Y = − 72200.000 を基点とする４ｍピッチのものを使用し、経線をＸ、緯線をＹとして北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第Ⅸ系）	世界測地系（第Ⅸ系）
X 135、Y 165	X = 43340.000 m、Y = − 71660.000 m	X = 43694.9094 m、Y = − 71951.7596 m

発掘調査は、遺構確認面まで重機（0.25 ㎥級バックホウ）を用いて表土を除去した。東側調査区は、盛土造成地である現地表面から遺構確認面までの深さが２ｍ以上に達したため、安全帯を設けた。表土除去は As-B 混入土層の下層までを目安とし、As-C 混入黒色土層～黒ボク土層を遺構確認面とした。遺構確認面は、ジョレンを用いて精査し、平面的な土質の観察によって遺構を判断した。遺構の重複や土質の類似によって、判断ができない場合は、調査に先行してサブトレンチを下層まで掘り、その底面と土層断面の観察により、遺構を判断した。確認した遺構は、土層を記録するために土層断面を残しつつ覆土を除去した。遺構に伴うと判断した遺物は、出土位置を記録した上で取り上げた。

遺構の図面記録は、断面図・平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用い、オルソーフォトを用いた写真測量も多用した。写真記録は、土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対し、35mm 判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・EFS18-135mm）を用い、基本的に絞り値ｆ８～ 11・広角端で撮影を行った。

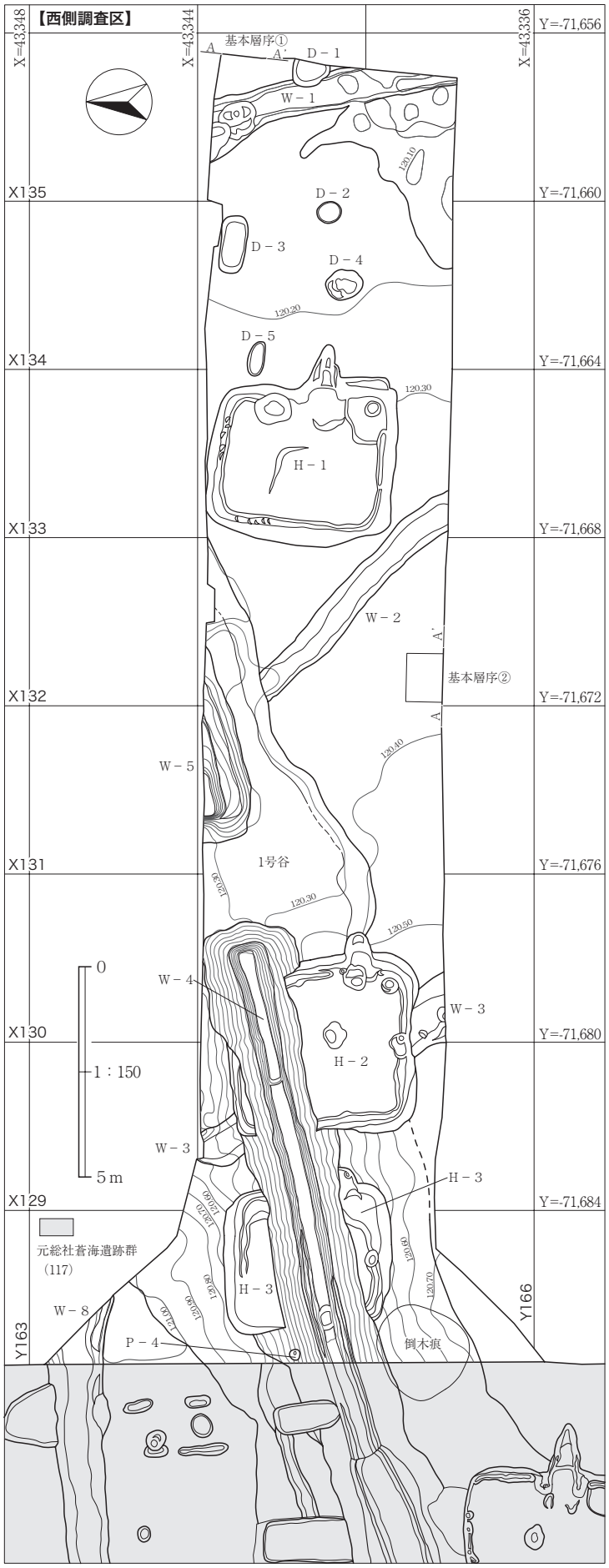
報告書の作成に際しては、DTP の手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集図に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、手測りでの原図作成後デジタルトレースを行った。遺物写真の撮影にはデジタルカメラ（CanonEOS ５D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれらの調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

2　調査経過

平成 28 年６月 21 日に市教委・区画整理課・技研の三者で事前打ち合わせを行い、発掘調査は７月７日から開始した。先行して畑土の搬出や、周辺の安全対策を行った上で、８日から表土除去を行い、並行して遺構確認や基本層序の確認を進めた。遺構調査は翌９日から始めた。個々の遺構調査に並行しながら終始、猛暑の中で深い溝跡を掘り続ける重労働が続いたが、調査地に残る既設水道の借用など、地域の方々の協力を得て、28 日にはほぼ全ての調査を終え、翌 29 日に調査区の全景写真を撮影した。同日中に、市教委による西側調査区の終了確認が行われ、その後、残務と撤収作業を行い、８月１日に西側調査区の調査を終えた。

区画整理事業に伴う工事による中断期間を挟み、８月 18 日から、東側調査区の表土除去を行った。並行して遺構確認を進め、翌 19 日から個々の遺構調査を始めた。23 日、前日の台風によって調査区壁が崩落。砕石混じりの土砂を人手で搬出し、調査を再開。25 日には全ての調査を終え、調査区の全景写真を撮影した。同日中に、市教委による東側調査区の終了確認が行われ、その後、撤収作業を行い、26 日に東側調査区の調査を終えた。

整理作業は、平成 28 年８月 29 日から着手した。９月９日に遺物の洗浄と注記を、30 日に遺構図面の編集作業を終えた。10 月４日に出土遺物の分類と報告対象の抽出を終え、観察と実測を始めた。14 日に遺構図面の版下が完成。原稿執筆と組版は 17 日から行った。11 月 24 日に遺物図面の版下が完成。12 月 12 日に出土遺物の写真撮影を終え、24 日に写真図版の版下が完成した。１月 30 日には原稿執筆と組版を終了。市教委による査読の後、２月 20 日に入稿した。３月 24 日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。



Tab. 2　隣接調査地点の基本層序

(117)	(121)	(118)	(101)	(33) 1区	(2) 7トレ	混入物等
Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ・Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	1	表土
－	－	－	Ⅱ	－	－	As-A
Ⅱ・Ⅲ	Ⅱ～Ⅳ	Ⅲ・Ⅳ	Ⅲ	Ⅱ	2	As-B
－	Ⅴ	－	Ⅳ・Ⅴ	－	－	As-B、Hr-FA、As-C
（1号谷）	Ⅵ	Ⅴ	－	－	－	10c 遺物包含層
Ⅳ	Ⅶ	－	Ⅵ	Ⅲ	3	Hr-FA・As-C
Ⅴ	Ⅷ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅳ	4	As-C
Ⅵ	Ⅸ	Ⅶ	Ⅷ～Ⅺ	－	－	黒ボク～淡色黒ボク土 縄文時代遺物包含層
－	Ⅹ	Ⅷ・Ⅸ	－	Ⅴ	5・6	総社砂層漸移層 粘質土
Ⅶ	－	－	Ⅻ～Ⅻ	－	－	総社砂層漸移層
Ⅷ	Ⅺ～Ⅻ	Ⅹ・Ⅺ	Ⅻ～Ⅻ	Ⅵ	7	総社砂層

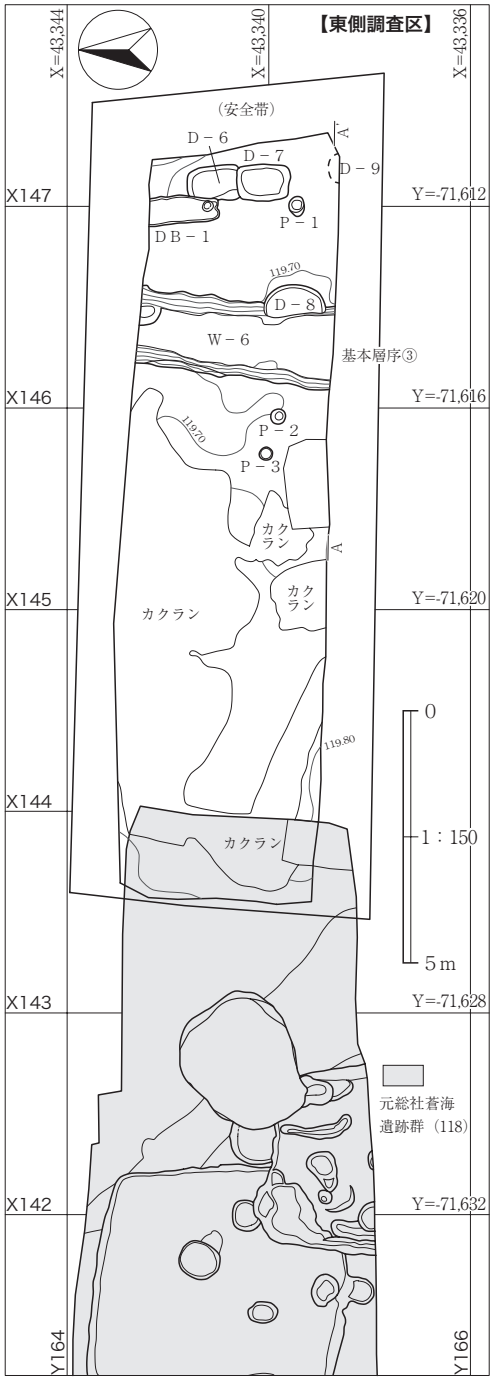


Fig. 4　全体図

Ⅳ　基本層序

調査以前の西側調査区は畑地であった。表土直下は As-B 混入土層のⅡ～Ⅳ層で、堆積は厚いため、現代の耕作による遺構への影響は弱い。Ⅵ層は１号谷の埋没土上層に相当し、９～11 世紀の遺物を少量包含するが、調査区のほぼ全域に堆積し、これ以前の遺構を覆い隠しているため、調査では包含層として面的に除去した。結果として、その直下の As-C 混入黒色土層であるⅧ層を遺構確認面とした。Ⅸａ層は多湿の黒ボク土で黒味がやや淡い。Ⅹ層は総社砂層の漸移層が粘質土化した層で、粘質土化は総社砂層最上層のⅪ層まで観察できる。隣接調査地点の基本層序における、このような多湿土壌の分布も鑑みると、該期には、水はけの悪い台地内の谷地が北西から南東方向に形成されており、西側調査区は、その中に位置していると推測できる。

調査以前の東側調査区は宅地であった。コンクリートブロックの砕石を混ぜた造成土のⅠ層が１m以上も盛土され、さらに調査区西半の大部分が、同質の造成土を含む大きな撹乱によって破壊されていた。西側調査区と異なりⅥ層は確認できず、Hr-FA を含むⅦ層が堆積する。Ⅶ層は炭化物の細片を含み、しまりは弱く、細分層が互層を成し、Ｗ－６に掘り込まれていることから、古墳時代の耕起層と判断できる。遺構確認面は理論上、この耕起層の直上にあたるが、Ⅶ層と遺構覆土の土質は類似しており、確認は困難だったため、直下のⅧ～Ⅻ層を実質的な確認面とした。多湿土壌のⅨａ～Ⅺ層は確認できず、湿性のやや弱いⅨｂ・Ⅻ層がこれに相当しており、東側調査区は、先述した台地内に形成された谷地の、外縁に位置していると推測できる。

周辺調査地点を含めた層序の比高差から、調査地点周辺は本来的に、総社砂層の堆積により形成された南東へ下る緩傾斜地と、その台地上を北西から南東方向へ開析する緩やかな谷地形から成り、Ｗ－４・５の開削後は、その埋没過程で一時的に東西方向へ浅く谷地化するが、As-B 混入土層が形成される頃には本来の地形傾斜に回復し、現在に至るものと推測できる。

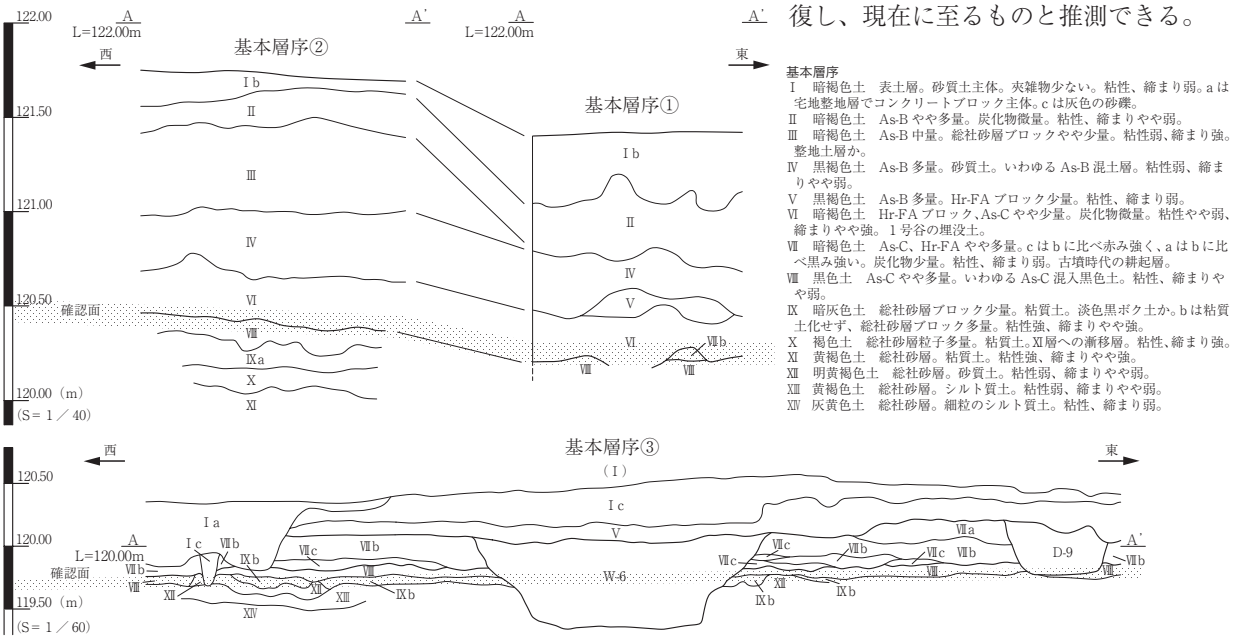


Fig.5　基本層序

Ⅴ　遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

Ｈ－１号住居跡（Fig.13・14・20、PL. ２・５）

位置　Ｘ 134・135、Ｙ 164・165　**主軸方向**　Ｅ－６°－Ｓ　**規模**　東西軸 4.82 m・南北軸 4.50 m・深さ 0.57 m　**面積**　16.85 ㎡　**覆土**　最上層は As-B をわずかに含む。以下の覆土は Hr-FA や As-C を含む。土坑１は覆土下層から掘り込まれており、カマド崩落土の裾を切る。　**床面**　貼床で、竪穴部の中央から北西壁際に、ややしま

りの強い硬化面。　**重複**　直接的な重複はないが、上位は１号谷の埋没土が被覆する。　**カマド**　東壁のやや南寄りで確認。全長（2.01）m・燃焼室内幅不明・煙道内幅 0.24m。19・20 層は白色粘土を多く含むことから袖構築土の可能性を考えたが、平面的な広がりはなく、明確な袖部は確認できない。火床面から推定できる燃焼室の、左奥手から出土した砂岩は、円柱状に加工され被熱が顕著で、小穴に据えられており、支脚の基部と判断できる。焚口部は内幅 0.44m で、構築材の据え穴と判断できる小穴が左右一対確認でき、左袖の据え穴には袖構築材の砂岩が残る。燃焼室と煙道部の境は有段で、燃焼室よりも一段高い煙道の底面は、緩やかに傾斜しながら煙出し部にかけて立ち上がる。煙道部の壁面は良く焼けている。燃焼室の掘り方は、方形に掘り込まれる。　**貯蔵穴**　竪穴部南東隅で確認。長軸 1.14 m・短軸 0.98 m・深さ 0.45 m。不整方形で浅い掘り込みの南東隅にＰ１が付属する。同時期に隣接する蒼海（117）Ｈ－１では、貯蔵穴内のピットに長胴甕が正位で安置されており、これに類似した構造が推定できる。掘り方には近接してＰ２が確認できる。Ｐ１と同規模であり、蒼海（117）Ｈ－１の例を参照すると、Ｐ１以前の長胴甕の据え穴の可能性がある。Ｐ２の中には破損したカマド構築材と判断できる砂岩の岩片が流入しており、これらの状況から間接的に、カマド燃焼室と貯蔵穴の造り直しが推測できる。
柱穴　確認できず。　**壁周溝**　ほぼ全周で確認できるが、貯蔵穴の周囲は途切れる。　**棚状施設**　床面から 0.42 mの高さに、幅 1.15 m・奥行 0.23 mの棚状施設が確認できる。底面は竪穴部に向かって緩く下り、硬化面は確認できない。カマド右側の竪穴部壁面上部の地山を掘り込んで構築され、桐生分類「AR アウトタイプ・素掘り」に相当する（桐生 2005）。棚上や棚下から遺物は出土しなかった。　**掘り方**　竪穴部の南西部が、不整方形に一段低く窪む。その底面は粘質土化した総社砂層であるⅪ層に達しており、竪穴部の掘削を利用して、粘質土を採土した可能性がある。　**出土遺物**　床面直上やカマド内から良好な遺物の出土はなかった。覆土下層から出土した３は、いわゆる北武蔵型坏で、口縁部はやや強く内屈する。覆土中～上層からは１・２・４～６が出土。１の蓋はカエリをもち、口径がやや大きい。２の坏は平城宮分類「坏Ｇ」に相当する。４はいわゆる北武蔵型坏で、３に比べ口径が大きく、口縁部は緩く直立し、外面は口縁部と底部の間に最終調整の無調整帯が残る。５の皿は、わずかだが胎土に結晶片岩の細片を含み、藤岡産の可能性がある。６は「房州石」と呼ばれる貝巣穴痕軟質泥岩で、被熱している。図示した土器のうち、２と３はやや古相、１と４はやや新相を示す。９の刀子はカマドの掘り方から出土した。　**時期**　出土遺物から、７世紀後半～８世紀前半と推定する。

Ｈ－２号住居跡（Fig.14・15・20、PL. ２・３・５）

位置　Ｘ 130・131、Ｙ 164・165　**主軸方向**　Ｅ－４°－Ｎ　**規模**　東西軸 4.82 m・南北軸 4.64 m・深さ 0.45 m　**面積**　18.55 ㎡　**覆土**　上層の１・２層は１号谷の覆土。以下の覆土は Hr-FA や As-C を含む。　**床面**　貼床で、竪穴部の北東部に、ややしまりの強い硬化面。土坑１は覆土中層から掘り込まれ、貼床を破壊している。　**重複**　Ｗ－３・４、１号谷と重複。新旧関係は本遺構→Ｗ－４→１号谷→Ｗ－３。　**カマド**　東壁の南寄りで確認。全長（2.76）m・燃焼室内幅不明・煙道内幅 0.67m。袖部は残存せず、破損したカマド構築材と判断できる砂岩や長胴甕が、床面直上～カマド崩落土最下層にかけて散乱する。ただし底面には、浅い掘り込みと支脚の基部や火床面が残存している。断面の観察では、新旧２面の使用面が確認できた。煙道部は短く、煙出し部は強い傾斜角で立ち上がり、壁面は良く焼けている。掘り方は、一回り大きい土坑状に掘り込まれている。　**貯蔵穴**　北東隅部に床面を掘り込むピットが確認でき、構築位置から貯蔵穴と判断した。長軸 0.39 m・短軸 0.37 m・深さ 0.29 m。上端に広く浅い段は付かないが、同時期に隣接する蒼海（117）Ｈ－１の例を参照すると、長胴甕の据え穴の可能性がある。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　全周で確認できる。　**掘り方**　わずかな起伏が観察できるが、全体的には平坦で浅い。底面はⅫ層。　**出土遺物**　１の模倣坏は、床面直上から出土したが小片で、図示したほかの土器よりも古相を示す。カマド内から出土した３・４の長胴甕は、口縁部に最大径をもつが「くの字」に屈曲し、肩部外面は横位のヘラケズリで調整される。覆土中から出土した２は、いわゆる北武蔵型坏で、口径が大きく、口縁部は緩く外傾し、外面は口縁部と底部の間に最終調整の無調整帯が残る。　**時期**　カマド内の出土遺物

から８世紀前半と推定する。

Ｈ－３号住居跡（Fig.16、PL. ３）

位置　X 129・130、Y 164・165　**主軸方向**　Ｅ－４°－Ｎ　**規模**　東西軸 3.84 m・南北軸 4.01 m・深さ 0.47 m　**面積**　13.36 ㎡　**覆土**　As-C を含む。　**床面**　直床。竪穴部の大半をＷ－４に破壊されるため詳細は不明だが、硬化面は観察できない。　**重複**　Ｗ－４、１号谷と重複。新旧関係は本遺構→Ｗ－４→１号谷。　**カマド**　東壁の南寄りで確認。西半はＷ－４に破壊されるため詳細は不明。構築材や崩落土も不明瞭。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　北西部を除いて確認できるが、不規則で浅い。　**掘り方**　なし。底面はⅫ層。　**出土遺物**　なし。　**時期**　重複関係から８世紀以前と推定する。

（２）溝跡

Ｗ－１号溝跡（Fig.16）

位置　X 134・135、Y 164・165　**主軸方向**　Ｎ－13°－Ｗ　**規模**　長さ（6.16）m・上幅 1.52 m・下幅 0.48 m・深さ 0.92 m　**形状等**　北西－南東に走向する。断面緩い孤状。南東へわずかに勾配が下り、南西部に浅い窪地を形成する。　**重複**　Ｄ－１と重複。新旧関係は本遺構→Ｄ－１。　**覆土**　上層は As-B を含む。以下の覆土は Hr-FA や As-C を含む。　**出土遺物**　覆土中から土師器・須恵器の坏・甕や陶器が出土したが、細片のため詳細不明。　**時期**　As-B 混入土層の堆積層位から、12 世紀以前と推定する。

Ｗ－２号溝跡（Fig.16）

位置　X 132・133、Y 164・165　**主軸方向**　Ｎ－38°－Ｗ　**規模**　長さ（8.08）m・上幅 0.83 m・下幅 0.41 m・深さ 0.82 m　**形状等**　北西－南東に走向する。断面Ｕ字状。南東へ勾配が下る。　**重複**　Ｗ－５、１号谷と重複。新旧関係はＷ－５→１号谷→本遺構。　**覆土**　As-B を含む。　**出土遺物**　覆土中から土師器の坏・甕や瓦が少量出土したが、細片のため詳細不明。　**時期**　覆土に As-B を含むことから 12 世紀以降と推定する。

Ｗ－３号溝跡（Fig.17、PL. ３）

位置　X 129・130、Y 164・165　**主軸方向**　Ｎ－32°－Ｗ　**規模**　長さ（7.34）m・上幅 1.22 m・下幅 0.73 m・深さ 0.51 m　**形状等**　北西－南東に走向する。断面緩い孤状。南東へわずかに勾配が下る。　**重複**　Ｈ－２、Ｗ－４、１号谷と重複。新旧関係はＨ－２→Ｗ－４→１号谷→本遺構。　**覆土**　As-B を含む。　**出土遺物**　覆土中から土師器・須恵器の坏・甕や瓦が出土したが、細片のため詳細不明。成体のウマの骨が、覆土中層から散乱した状態で出土した。　**時期**　覆土に As-B を含むことから 12 世紀以降と推定する。

Ｗ－４号溝跡（Fig.18・20、PL. ３・５）

位置　X 128～130、Y 164～165　**主軸方向**　Ｅ－16°－Ｎ　**規模**　長さ（11.01）m・上幅 2.40 m・下幅 0.30 m・深さ 1.05 m　**形状等**　北東－南西に走向する。断面逆台形状。底面は東端部と南端部にわずかな段差があるが、全体的に明確な勾配差は観察できない。　**重複**　Ｈ－２・３、Ｗ－３、Ｐ－４、１号谷と重複。新旧関係は（倒木痕→）Ｈ－２・３→本遺構→１号谷→Ｗ－３。Ｐ－４と本遺構の新旧関係は不明。　**覆土**　１～５層は１号谷の覆土で、本遺構を被覆する。上層の７～９層は蒼海（117）Ｗ－２の８～13 層に相当し、土質は粒度がやや細かい。中層の 10 層は蒼海（117）Ｗ－２の 14 層に相当し、総社砂層のブロックを多く含み、埋め戻し土と判断できる。蒼海（117）Ｗ－２の相当層では硬化面が確認できたが、平面的にはスポット状の硬化面として形成されており、本遺構 SPA では確認できなかった。12・14 層は７～９層に類似する。以下最下層まで、総社砂層の粒子を多く含む黄褐色系の土と、これにブロック状の総社砂層を多く含む土が互層に堆積し、やや短期間の埋め戻し土と判断できる。葉理構造や砂層の堆積など流水の痕跡は観察できない。　**出土遺物**　覆土中から土師器の坏・甕や須恵器の坏・甕・壺が出土したが、いずれも細片であり、出土位置を考えると、重複するＨ－２・３から流入した資料の可能性がある。１はいわゆる北武蔵型坏で、口縁部は直立する。　**時期**　重複関係から８世紀中葉～９世紀と推測する。　**備考**　本遺構は、連続的に調査を行った蒼海（117）Ｗ－２と同一の溝跡。東側

には土橋状の掘り残し部を挟みＷ－５が続き、合わせた総延長は23.20ｍを測る。また蒼海（117）Ｗ－３は、重複と位置関係から本遺構に付属する小溝と推測できる。

Ｗ－５号溝跡（Fig.18・20、PL. ４・５）

位置　X 132～133、Y 164　**主軸方向**　Ｅ－16°－Ｎ　**規模**　長さ（4.56）ｍ・上幅（2.33）ｍ・下幅（0.29）ｍ・深さ1.48ｍ　**形状等**　北東－南西に走向する。大半は調査区外のため詳細不明だが、一連の遺構と判断できるＷ－４を参照するに、断面逆台形状と推定できる。　**重複**　Ｗ－２、１号谷と重複。新旧関係は本遺構→１号谷→Ｗ－２。　**覆土**　１～３層は１号谷の覆土で、本遺構を被覆する。上層の４層はＷ－４の７層に相当し、土質は粒度がやや細かい。中層の６層はＷ－４の10層に相当し、総社砂層のブロックを多く含み、埋め戻し土と判断できる。蒼海（117）Ｗ－２の相当層では硬化面が確認できたが、平面的にはスポット状の硬化面として形成されており、本遺構SPAでは確認できなかった。７・８層はＷ－４の２・14層に相当する。９・11・12層はＷ－４の下層部分に相当し、総社砂層の粒子を多く含む黄褐色系の土と、これにブロック状の総社砂層を多く含む土が互層に堆積し、やや短期間の埋め戻し土と判断できる。葉理構造や砂層の堆積など流水の痕跡は観察できない。　**出土遺物**　覆土中から土師器の坏・甕がわずかに出土したが、いずれも細片のため詳細不明。１の刀子は覆土上層から出土した。　**時期**　重複関係とＷ－４の所見から、８世紀中葉～９世紀と推定する。　**備考**　本遺構とＷ－４の間の土橋状の掘り残し部において面的な精査を行ったが、硬化面やピット群など、関連する遺構は確認できなかった。

Ｗ－６号溝跡（Fig.17・21、PL. ４・５）

位置　X 147、Y 164・165　**主軸方向**　Ｎ－５°－Ｅ　**規模**　長さ（3.40）ｍ・上幅1.71ｍ・下幅0.92ｍ・深さ0.68ｍ　**形状等**　南北に走向する。断面逆台形状。底面に明確な勾配差は観察できない。　**重複**　Ｄ－８と重複。新旧関係は本遺構→Ｄ－８。　**覆土**　新旧２段階の堆積に大別でき、再掘削を伴うと判断できる。１～４層は新段階の覆土で、総社砂層ブロックをやや多く含み、７世紀後半の土器をやや多く包含する。５・６層は古段階の覆土で、最下部には部分的に６層の砂礫層が堆積する。　**出土遺物**　新段階の中～下層から、土師器坏と須恵器甕が破損して散乱した状態で出土した。１～３は、いわゆる北武蔵型坏で、口縁部は強く内屈する。２・３の胎土には、風化して金色の光沢を帯びた黒雲母の微細粒が目立ち、藤岡産の可能性がある。４～６は中型の甕で、５はわずかだが胎土に結晶片岩の細片を含み、藤岡産の可能性がある。出土状況と層位、遺物の型式的な共時性から、図示した遺物は一括性が高いと判断できる。　**時期**　堆積状況と出土遺物から、７世紀中葉～８世紀以前と推定する。

（３）土坑、ピット（Fig.19）

Ｄ－３は、形状・規模から土坑墓の可能性があるが、人骨は出土しなかった。Ｄ－６・７・９は、南北軸に連なる土坑群で、確認面が適切ではないため詳細不明だが、Ｄ－９の断面観察によれば、本来はある程度の深さがあり、As-Bを非常に多く含む。東側の調査区外には蒼海城の堀跡が同軸で走向しており、関連する土坑群の可能性もある。Ｐ－４はＷ－４と重複するが、前後関係は判断できなかった。

なお、各遺構の計測値については、Tab. ３に示す。

Tab. ３　元総社蒼海遺跡群（121）土坑、ピット計測表

遺構名	位　置	長軸	短軸	深さ	平面形状	主な遺物	時期	備　考
Ｄ－１	X 136 Y 164	0.87	(0.61)	0.11	不整円形	－	中世以降	As-B を含む。 W-1 を切る。
Ｄ－２	X 135 Y 164	0.56	0.51	0.07	円形	－	中世以降	As-B を含む。
Ｄ－３	X 135 Y 164	1.36	0.59	0.27	隅丸長方形	－	中世以降	As-B を含む。
Ｄ－４	X 135 Y 164	0.87	0.70	0.21	円形	－	中世以降	As-B を含む。
Ｄ－５	X 135 Y 164	0.84	0.38	0.16	長楕円形	－	中世以前	As-B を含まない。
Ｄ－６	X 148 Y 164	1.09	0.68	0.06	隅丸長方形	－	中世以降	As-B を含む。 D-7 を切る。
Ｄ－７	X 148 Y 164・165	1.06	0.72	0.05	隅丸長方形	－	中世以降	As-B を含む。 D-6 に切られる。
Ｄ－８	X 147 Y 164・165	1.26	1.09	0.25	楕円形	土師器坏・瓦	８～11世紀	As-B を含まない。 W-6 を切る。
Ｄ－９	X 148 Y 165	－	0.77	0.40	－	－	中世以降	As-B を含む。
Ｐ－１	X 146・147 Y 165	0.39	0.29	0.11	円形	－	中世以前	As-B を含まない。
Ｐ－２	X 145 Y 165	0.28	0.28	0.19	円形	－	中世以前	As-B を含まない。
Ｐ－３	X 145 Y 165	0.26	0.26	0.07	円形	－	中世以前	As-B を含まない。
Ｐ－４	X 129 Y 164	0.25	0.23	0.36	円形	－	中世以前	As-B を含まない。 W-4 に重複。

（4）土坑墓

DB－1号土坑墓（Fig.19・20、PL. 4・5）

位置　X 164、Y 146・147　**主軸方向**　（N－4°－W）　**規模**　東西軸 0.56 m・南北軸 1.60 m・深さ 0.52 m　**形状**　長方形。底面は弱い起伏がある。　**覆土**　土層の堆積状況から、1・4・6層は棺内の埋没土、5・7層は墓坑の埋め戻し土、8層は棺床の整地土と考えることができ、木棺直葬の可能性がある。　**重複**　本遺構の東側にはⅣ層土の落ち込みが観察でき、遺構として把握できなかったが、D－6・7・9に連なる土坑群の1基が重複していた可能性が高い。　**出土遺物**　被葬者は成人女性と鑑定された。北頭位の仰臥伸展葬で埋葬される。土層断面から木棺の存在を推定できるが、鉄釘は出土しなった。遺物は、須恵器の埦と小皿が2点ずつ出土した。Ⅳ層土の落ち込みによる攪拌を受けて破損しているが、残存率は高いので、本遺構に伴う遺物と判断できる。1・2の埦は酸化焔焼成で高台は高い。3の小皿は底径が大きく、やや深身。ただし4の小皿は対照的で、底径は非常に小さく、浅身。　**時期**　出土遺物から 10 世紀後半と推定する。

（5）埋没谷

1号谷（Fig.18・21、PL. 5）

位置　X 128～133、Y 163～165　**主軸方向**　E－16°－N　**規模**　長さ（17.29）m・幅 8.50～5.23 m・深さ 0.48 m　**形状等**　北東－南西に走向する。断面緩い孤状。　**重複**　H－2・3、W－2～5、P－4と重複。新旧関係は（倒木痕→）H－2・3→W－4・5（・P－4）→本遺構→W－2・3。　**覆土**　Hr-FA や As-C を含み、土質は粒度が細かい。中層のW－4・1号谷 SPA 2・3層はしまりの強い薄層で、平面的にはスポット状の硬化面として観察できた。　**出土遺物**　底面直上～覆土最下層から獣骨が散乱した状態で出土し、下顎骨は成体のウシと鑑定された。覆土中には 10 世紀代の土器片がやや多く、土師器・須恵器の碗・甕などの細片を含む。1の埦は高台の作りが粗い。2は角閃石安山岩の棒状円礫で、部分的に強く摩滅しており、研磨具としての使用が推定できる。　**時期**　覆土中に包含される遺物と重複関係から、10 世紀と推定する。　**備考**　本遺構は、連続的に調査を行った蒼海（117）1号谷と同一の埋没谷。総延長は 25.10 mを測る。W－4・5の上部に沿って形成されており、両溝の埋没過程に生じた谷地形と判断できる。明確な痕跡としては残存しないものの、蒼海（118）Ⅴ層は本遺構に関連する包含層と判断できる。

（6）遺構外出土遺物

遺構外から際立った遺物の出土はない。1は縄文時代前期後葉の諸磯b式。2は頁岩製の無茎鏃。3の鉄釘は表土中から出土した。

Ⅵ　自然科学分析

大妻女子大学博物館　　楢﨑　修一郎

（1）元総社蒼海遺跡群（121）DB－1号土坑墓出土古代人骨

はじめに　元総社蒼海遺跡群（121）は、前橋市元総社町に所在する。前橋市教育委員会による発掘調査が、2016（平成 28）年7月から同年8月まで行われた。発掘調査の実務は、技研コンサル株式会社が担当している。

本遺跡群のDB－1号土坑墓より、古代の人骨が出土したので以下に報告する。人骨の時期は、出土土器より 10 世紀後半に比定されている。なお、人骨の保存状態が悪いため、計測できた人骨はなかった。

1．人骨の出土状況　人骨は、長軸（南北）約 160 cm・短軸（東西）約 55 cm 前後・深さ約 50cm 前後の長方形土坑から出土している。なお、頭蓋骨は調査区外の北部から検出されている。

2．人骨の出土部位　人骨の残存状態は悪く、頭蓋骨片及び四肢骨片が出土している。なお、歯は検出されなかっ

た。

３．副葬品　副葬品は、須恵器埦２点・須恵器小皿２点が検出されている。

４．被葬者の頭位・埋葬状態　出土人骨の残存状態は非常に悪いが、頭蓋骨の出土位置から、頭位は北であると推定される。四肢骨片も交叉するのではない状態であるため、仰臥伸展葬であると推定される。前橋市周辺の古代人骨は、仰臥伸展葬が特徴である。

５．被葬者の個体数　出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は１個体であると推定される。

６．被葬者の性別　頭蓋骨の厚さは、比較的薄く女性的である。人骨の出土状況からは、被葬者の身長は約 145 cm 程度と推定される。残念ながら、古代人骨の身長に関するまとまったデータは無いが、中世人骨の場合、鎌倉時代人骨は、男性が平均 159 cm［153 cm ～ 167 cm］・同女性が平均 145 cm［140 cm ～ 149 cm］であり、室町時代人骨は、男性が平均 157 cm［149 cm ～ 166 cm］・同女性が平均 147 cm［138 cm ～ 153 cm］である（平本　1972）。総合的に、被葬者の性別は女性であると推定される。

Fig.6　ＤＢ－１号土坑墓人骨出土状況（南から）

７．被葬者の死亡年齢　出土人骨の残存状況が悪いため、死亡年齢推定の指標となる部位が検出されていない。しかしながら、恐らく、成人であると推定される。このことは、推定身長からも裏付けられる。

まとめ　元総社蒼海遺跡群（121）のＤＢ－１号土坑墓から、10 世紀後半代の古代人骨１体が出土した。被葬者は、成人女性で、仰臥伸展葬で埋葬されたと推定された。

引用文献

平本嘉助　1972　「縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化」『人類学雑誌』、80：221-236

（２）元総社蒼海遺跡群（121）出土獣骨

はじめに　元総社蒼海遺跡群（121）は、前橋市元総社町に所在する。前橋市教育委員会による発掘調査が、2016（平成 28）年７月から同年８月まで行われた。発掘調査の実務は、技研コンサル株式会社が担当している。

本遺跡群の溝と埋没谷より、獣骨が出土したので以下に報告する。

１．Ｗ－３号溝跡出土獣骨　獣骨の時期は、溝であるため特定は困難であるが、溝から As-B（浅間山降下Ｂ軽石）が検出されており、時期は天仁元年（1108 年）と考えられているため、中世以後に比定されている。ただ、１号谷からの混入の可能性もあるという。確実に同定できた部位は、右橈骨尺骨（No.1）と左上腕骨（No.2）である。いずれも、成体のウマ（馬）である。

２．１号谷出土獣骨　獣骨の時期は、埋没谷であるため特定は困難であるが、遺構の重複関係と出土遺物から、10 世紀代に比定されている。確実に同定できた部位は、下顎骨右及び下顎歯である（No.1）。これは、成体のウシ（牛）である。

まとめ　元総社蒼海遺跡群（121）のＷ－３号溝跡・１号谷から、獣骨が出土した。中世以降のＷ－３号溝跡からは、ウマ（馬）の四肢骨が出土した。中でも、右橈骨尺骨及び左上腕骨が同定できた。古代の１号谷からは、ウシ（牛）の下顎骨右及び下顎歯が出土した。

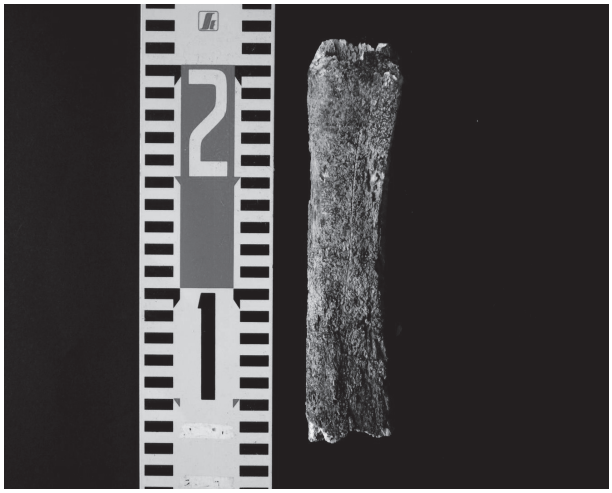


Fig. 7　W－３号溝跡出土馬骨：No.1・右橈骨尺骨後面観

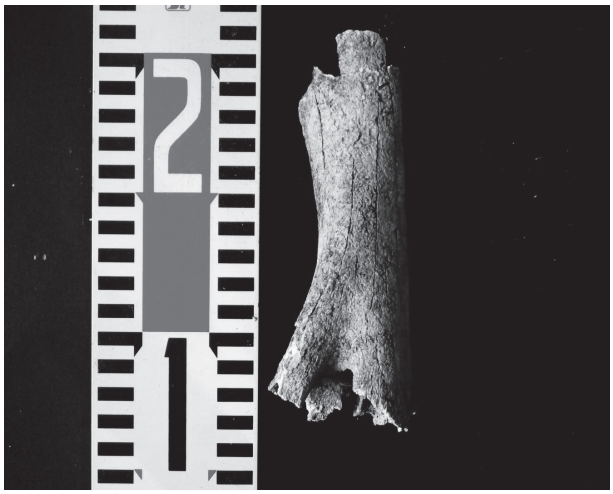


Fig. 8　W－３号溝跡出土馬骨：No.2・左上腕骨前面観

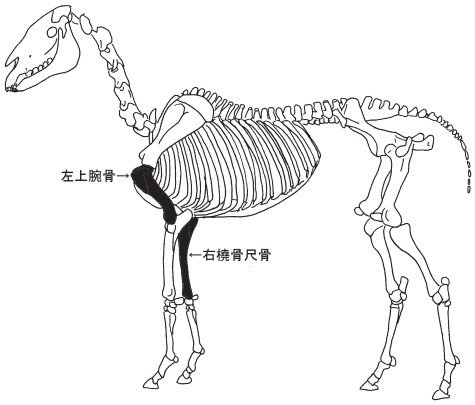


Fig. 9　W－３号溝跡出土馬骨出土部位図
［young（1950）を改変］

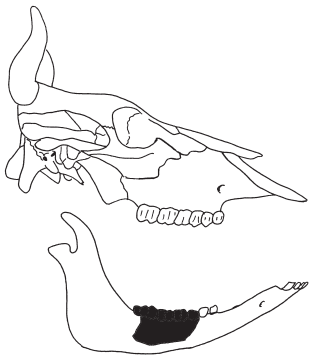


Fig.10　W－4号溝跡出土ウシ（牛）出土部位図
［樽野（1986）を改変］

Fig.11　W－４号溝跡獣骨出土状況

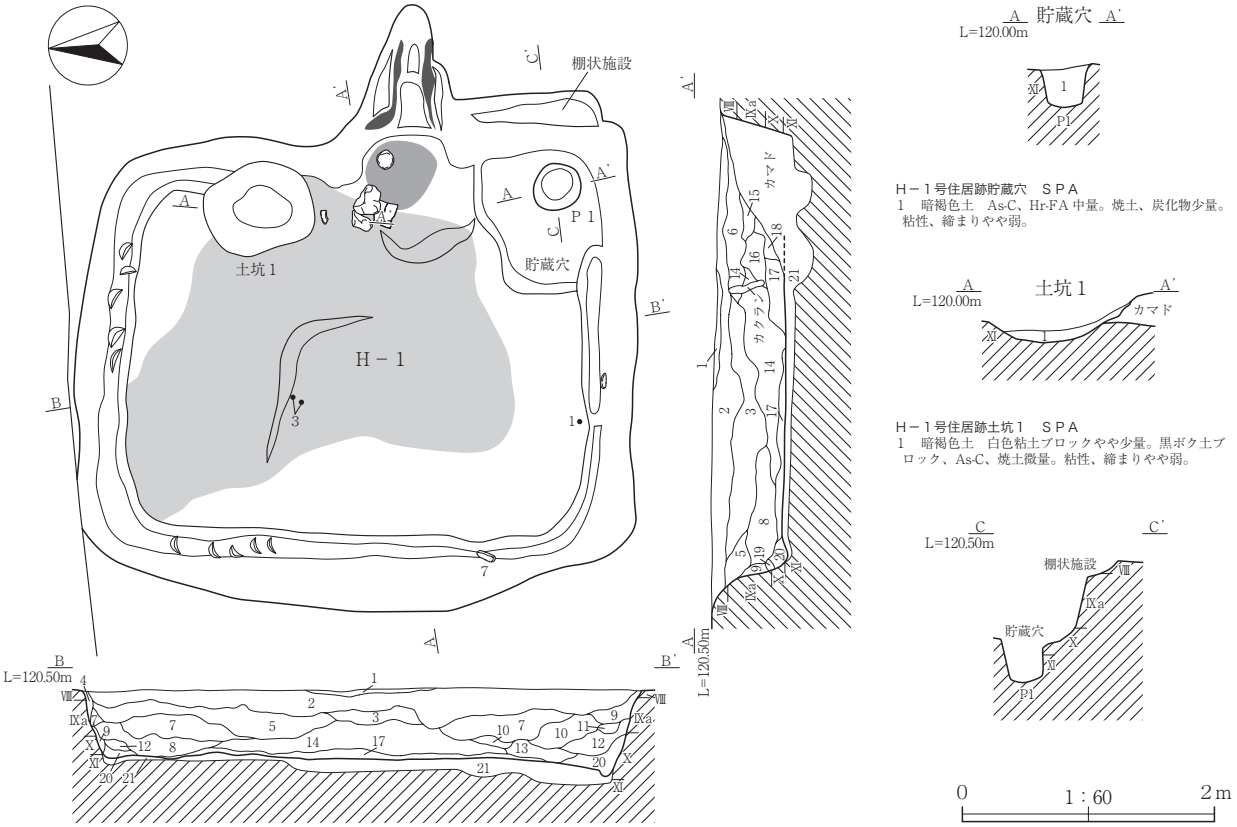
Fig.12　W－４号溝跡出土ウシ（牛）右下顎骨

引用文献

樽野博幸　1986　『けものの歯』、大阪市立自然史博物館

YOUNG, J.Z.　1950　“The Life of Vertebrates”, Oxford University Press

Ｈ－１



Ｈ－１号住居跡　ＳＰＡ･ＳＰＢ

1　暗褐色土　As-B 少量。総社砂層ブロック微量。粘性、締まり弱。
2　暗褐色土　Hr-FA ブロック、As-C やや多量。炭化物中量。粘性、締まりやや強。
3　黒褐色土　As-C やや少量。白色粘土ブロック少量。粘性、締まりやや強。
4　黒褐色土　As-C やや少量。Ⅸ層土やや多量。粘性、締まりやや強。
5　暗褐色土　As-C、炭化物少量。Hr-FA ブロックやや少量。粘性、締まりやや強。
6　暗褐色土　As-C、白色粘土ブロック、焼土、炭化物少量。粘性、締まりやや強。
7　黒褐色土　As-C、Hr-FA 少量。Ⅸ層土やや多量。粘性、締まりやや強。
8　暗褐色土　As-C 少量。総社砂層粒子、炭化物微量。粘性、締まりやや強。
9　暗黄褐色土　総社砂層粒子多量。粘性、締まりやや強。（壁面崩落土）
10　暗褐色土　As-C 少量。総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まりやや強。
11　黒褐色土　Ⅸ層土多量。Hr-FA ブロックやや少量。粘性、締まり強。
12　黒褐色土　Ⅸ層土ブロックやや多量。総社砂層粒子、炭化物少量。粘性、締まりやや強。
13　暗褐色土　As-C 少量。総社砂層粒子中量。粘性、締まりやや強。
14　暗褐色土　As-C、白色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物やや少量。粘性、締まりやや強。
15　褐色土　As-C 微量。白色粘土やや多量。焼土ブロック、炭化物少量。粘性、締まり強。（カマド崩落土）
16　黒褐色土　As-C、炭化物少量。白色粘土、焼土やや少量。粘性、締まりやや強。
17　黒褐色土　As-C、Hr-FA 少量。やや砂質。粘性、締まりやや弱。
18　褐色土　白色粘土多量。焼土少量。粘性、締まり強。（カマド崩落土）
19　暗黄褐色土　総社砂層粒子多量。粘性、締まりやや強。
20　暗褐色土　Hr-FA ブロック、総社砂層ブロック、As-C 少量。粘性、締まりやや強。
21　暗褐色土　総社砂層ブロックやや多量、粘性、締まり強。（床面構築土）

Ｈ－１掘り方

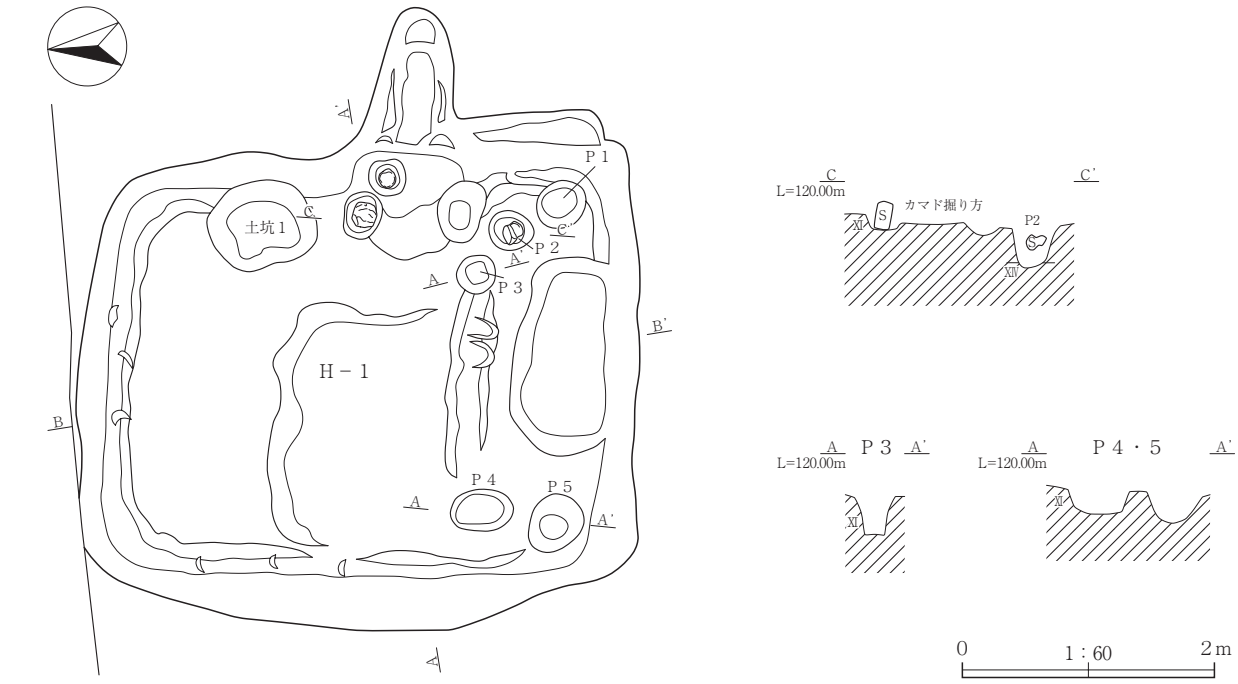
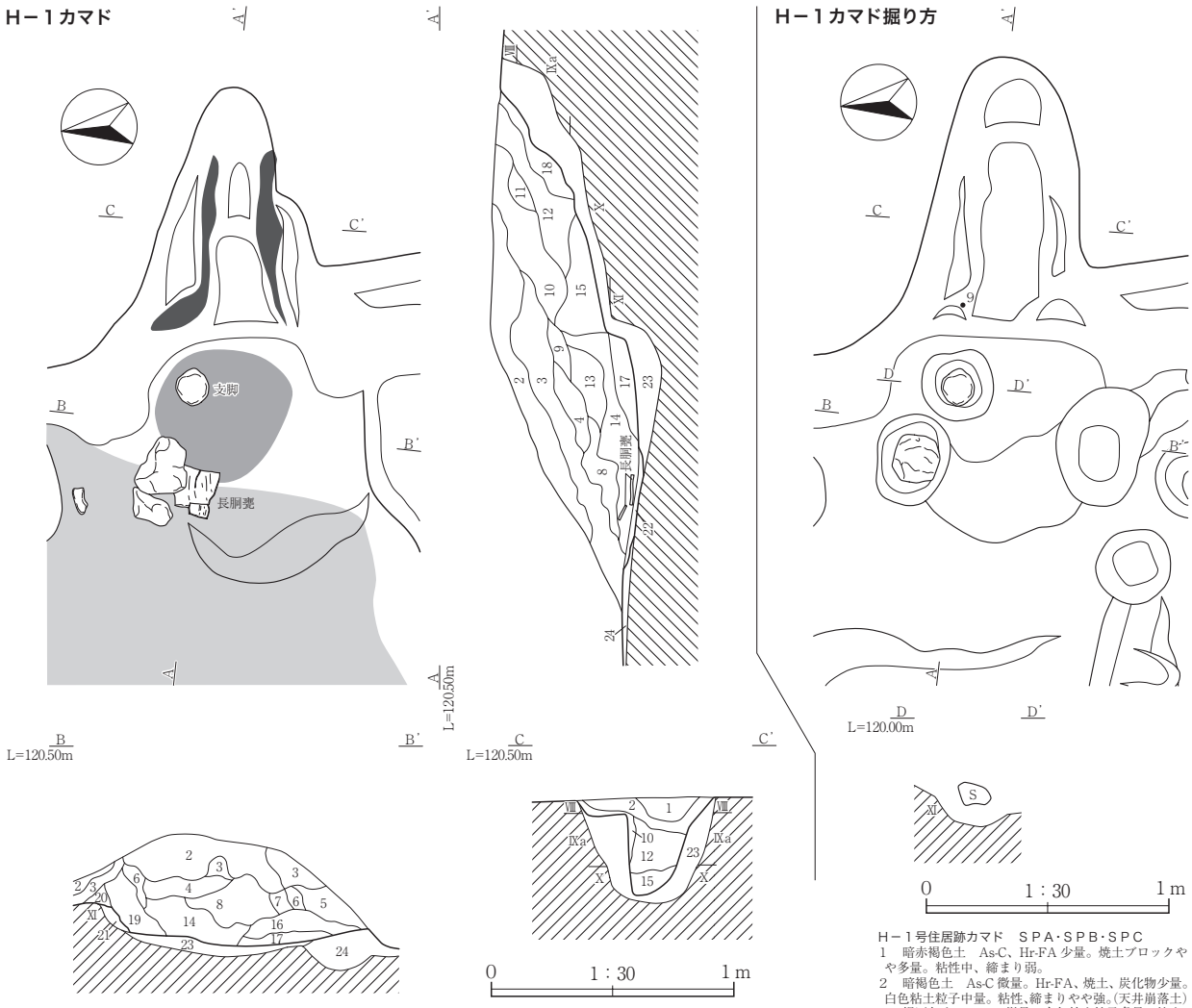


Fig.13　Ｈ－１号住居跡



H－1号住居跡カマド　SPA・SPB・SPC

1　暗赤褐色土　As-C、Hr-FA 少量。焼土ブロックやや多量。粘性中、締まり弱。
2　暗褐色土　As-C 微量。Hr-FA、焼土、炭化物少量。白色粘土粒子中量。粘性、締まりやや強。(天井崩落土)
3　褐灰色土　Hr-FA 微量。白色粘土粒子多量。焼土、炭化物少量。粘性強、締まりやや強。(天井崩落土)
4　褐灰色土　焼土ブロック、炭化物やや多量。白色粘土粒子多量。粘性、締まりやや強。(被熱した天井内壁崩落土)
5　褐灰色土　3層に類似。白色粘土粒子中量。粘性、締まりやや弱。
6　明赤褐色土　焼土主体。粘性弱、締まり強。(被熱した燃焼室内壁面崩落土)
7　黒褐色土　焼土、白色粘土少量。粘性、締まりやや弱。
8　褐灰色土　3層に類似。白色粘土ブロック多量。粘性強、締まりやや強。(天井崩落土)
9　暗褐色土　4層に類似。焼土ブロック、炭化物やや多量。粘性、締まりやや弱。(被熱した天井内壁崩落土)
10　明赤褐色土　6層に類似。焼土ブロック多量。粘性弱、締まり強。(被熱した煙道壁面構築土)
11　明赤褐色土　大型の焼土ブロック。粘性弱、締まり強。(被熱した煙道壁面構築土)
12　黒色土　焼土ブロック中量。炭化物やや多量。粘性、締まり弱。
13　灰白色土　白色粘土粒子主体。炭化物微量。粘性強、締まりやや強。
14　褐灰色土　焼土ブロック、炭化物、灰中量。粘性やや強、締まり弱。
15　にぶい赤褐色土　焼土ブロックやや多量、灰中量。粘性やや強、締まり中。
16　褐灰色土　14層に類似。白色粘土やや多量。粘性、締まりやや弱。
17　褐灰色土　14層に類似。焼土粒子、炭化物、灰やや少量。粘性、締まりやや弱。
18　黒褐色土　12層に類似。焼土粒子少量。粘性、締まり弱。
19　褐灰色土　白色粘土ブロック主体。粘性、締まりやや強。
20　灰白色土　白色粘土粒子主体。粘性強、締まりやや強。
21　黒褐色土　As-C、総社砂層粒子少量、粘性、締まり弱。
22　灰褐色土　灰ブロック多量。粘性、締まり弱。
23　黒褐色土　焼土ブロック少量。粘性、締まりやや弱。(掘り方覆土)
24　暗褐色土　SPA・SPB の 21 層と同じ。総社砂層ブロックやや多量。粘性、締まり強。(床面構築土)

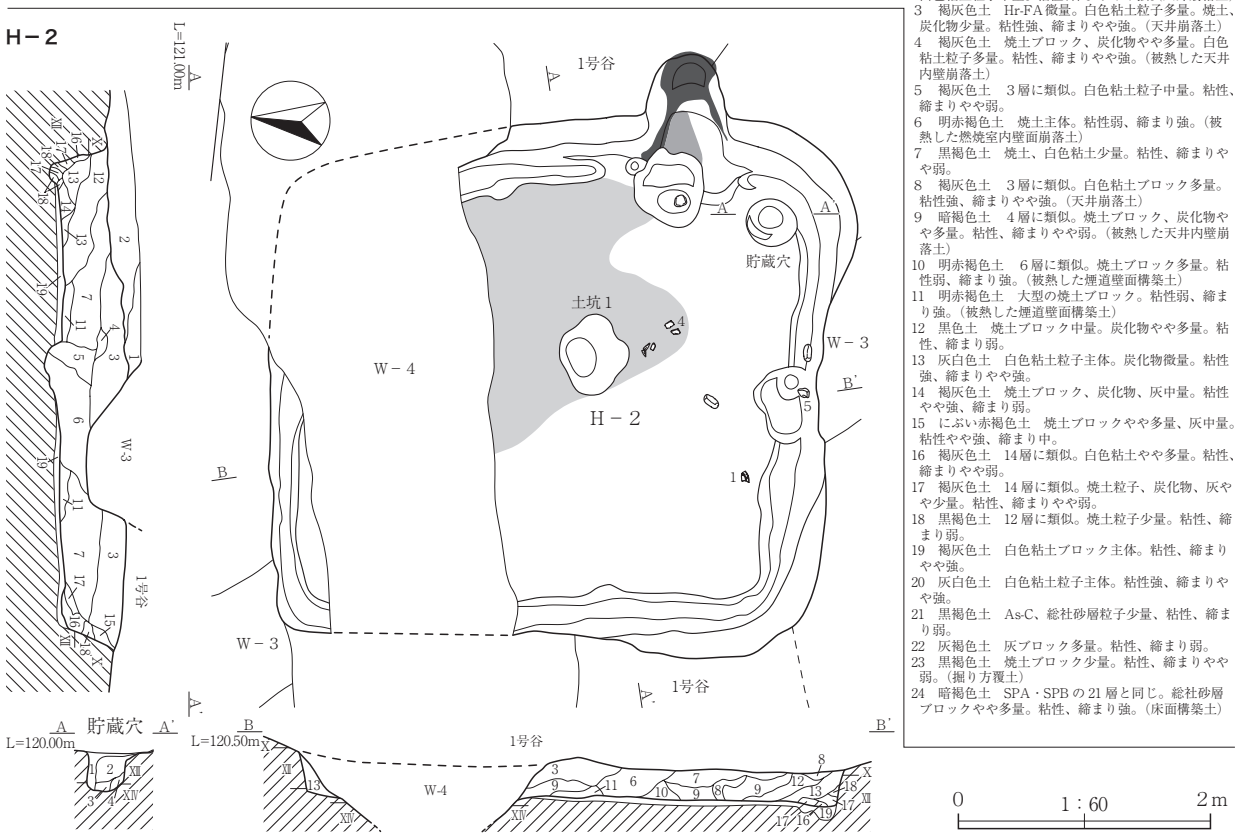
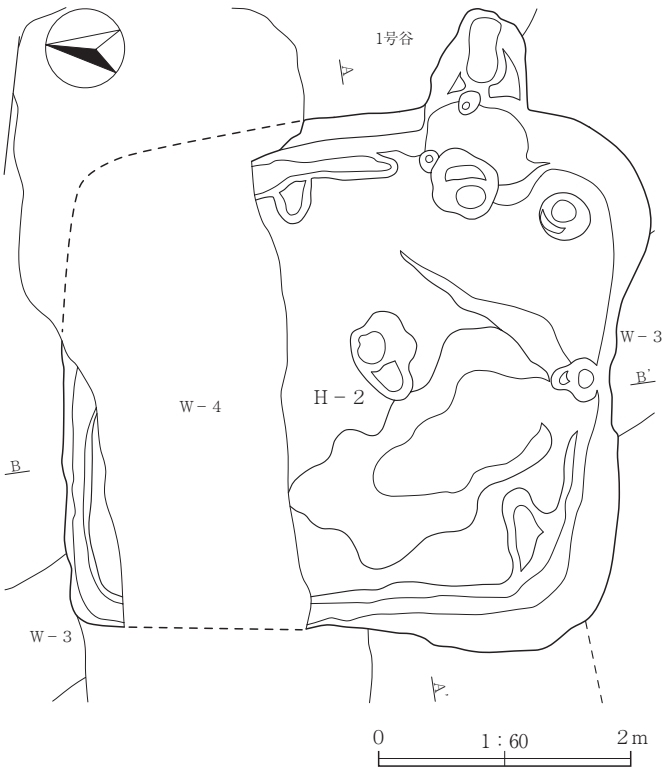


Fig.14　H－1号住居跡②、H－2号住居跡①

Ｈ－２掘り方

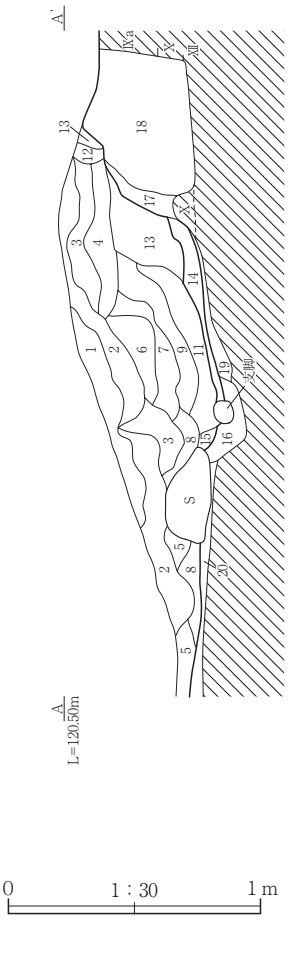


Ｈ－２号住居跡　ＳＰＡ･ＳＰＢ
1　暗褐色土　Ｗ－４・１号谷ＳＰＡの４層と同一。As-C、Hr-FA、総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや弱。（１号谷覆土）
2　暗褐色土　Ｗ－４・１号谷ＳＰＡの５層と同一。As-C やや少量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや弱。獣骨片は含まない。（１号谷覆土）
3　黒褐色土　As-C やや多量。Hr-FA、炭化物少量。粘性、締まりやや弱。
4　黒褐色土　３層に類似。焼土ブロック少量。粘性、締まりやや弱。
5　暗褐色土　暗褐色砂質土主体。FA 粒子やや少量。粘性、締まり弱。（埋没過程の不整形な掘り込み）
6　暗褐色土　暗褐色砂質土主体。総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。（埋没過程の不整形な掘り込み）
7　黒褐色土　３層に類似。As-C 中量。Hr-FA 少量。炭化物やや少量。粘性、締まりやや弱。
8　灰黄褐色土　総社砂層ブロック多量。粘性、しまり弱。
9　黒褐色土　３層に類似。As-C やや少量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや弱。
10　褐灰色土　白色粘土ブロック中量。焼土、炭化物少量。粘性、締まり弱。（カマド崩落土）
11　にぶい黄褐色土　As-C 少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。
12　黒褐色土　３層に類似。As-C、Hr-FA 少量。白色粘土ブロック、焼土、炭化物微量。粘性、締まりやや弱。
13　黒色土　総社砂層粒子少量。炭化物やや少量。粘性、締まり弱。
14　にぶい黄褐色土　11 層に類似。総社砂層粒子やや多量。炭化物少量。粘性、締まりやや弱。
15　黒色土　Ⅶ層土主体。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
16　褐色土　総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
17　黒色土　Ⅸ層主体。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
18　黄褐色土　総社砂層ブロック主体。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
19　暗黄褐色土　総社砂層ブロックやや多量。粘性やや弱、締まりやや強。（床面構築土）

Ｈ－２号住居跡貯蔵穴　ＳＰＡ
1　黒色土　As-C 中量。焼土、炭化物少量。粘性、締まり弱。
2　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロック多量。粘性、締まり弱。
3　黒褐色土　総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。
4　にぶい黄褐色土　２層に類似。総社砂層粒子多量。粘性、締まり弱。

Ｈ－２号住居跡カマド　ＳＰＡ･ＳＰＢ
1　暗褐色土　As-C、焼土やや少量。白色粘土粒子中量。粘性、締まり弱。
2　黒褐色土　炭化物、白色粘土粒子少量。粘性、締まり弱。
3　褐灰色土　白色粘土粒子多量。粘性やや強、締まり弱。
4　褐灰色土　白色粘土粒子多量。焼土ブロック中量。炭化物、灰少量。粘性、締まり弱。
5　にぶい黄褐色土　Hr-FA 中量。炭化物少量。粘性、締まり弱。
6　黒褐色土　２層に類似。炭化物、白色粘土粒子微量。粘性、締まりやや弱。
7　灰褐色土　白色粘土主体。焼土、炭化物微量。粘性、締まりやや強。（天井崩落土）
8　暗褐色土　総社砂層粒子やや多量。白色粘土ブロック中量。炭化物やや少量。粘性、締まり弱。
9　黒色土　焼土ブロック中量。炭化物多量。粘性、締まり弱。
10　暗黄褐色土　総社砂層粒子やや多量。焼土粒子微量。粘性、締まり弱。（住居壁崩落土）
11　褐灰色土　白色粘土ブロックやや少量。灰中量。粘性、締まりやや弱。
12　暗灰色土　焼土ブロック少量。灰やや多量。粘性、締まり弱。
13　赤褐色土　焼土ブロック多量。炭化物、灰やや多量。粘性、締まり弱。（被熱した天井内壁崩落土）
14　灰褐色土　焼土少量。灰多量。粘性、締まり弱。（使用面②）
15　黒色土　As-C 少量。砂岩片やや少量。粘性、締まり弱。
16　黒色土　15 層に類似。As-C、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。（支脚据え穴か）
17　明赤褐色土　焼土ブロック主体。粘性弱、締まり強。（被熱した煙道奥壁面）
18　黒褐色土　焼土ブロック、炭化物やや少量。粘性、締まりやや弱。（煙道掘り方覆土）
19　灰褐色土　14 層に類似。焼土微量。灰多量。粘性、締まり弱。（使用面①）
20　暗黄褐色土　SPA･SPBの19層と同じ。総社砂層ブロックやや多量。粘性やや弱、締まり強。（床面構築土）

Ｈ－２カマド



Ｈ－２カマド掘り方

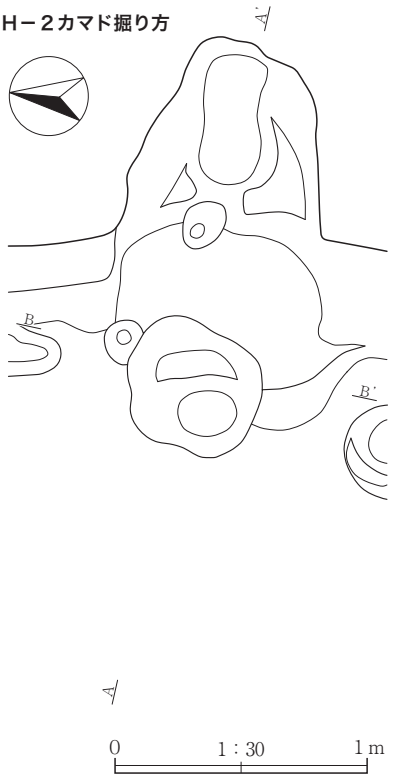


Fig.15　Ｈ－２号住居跡②

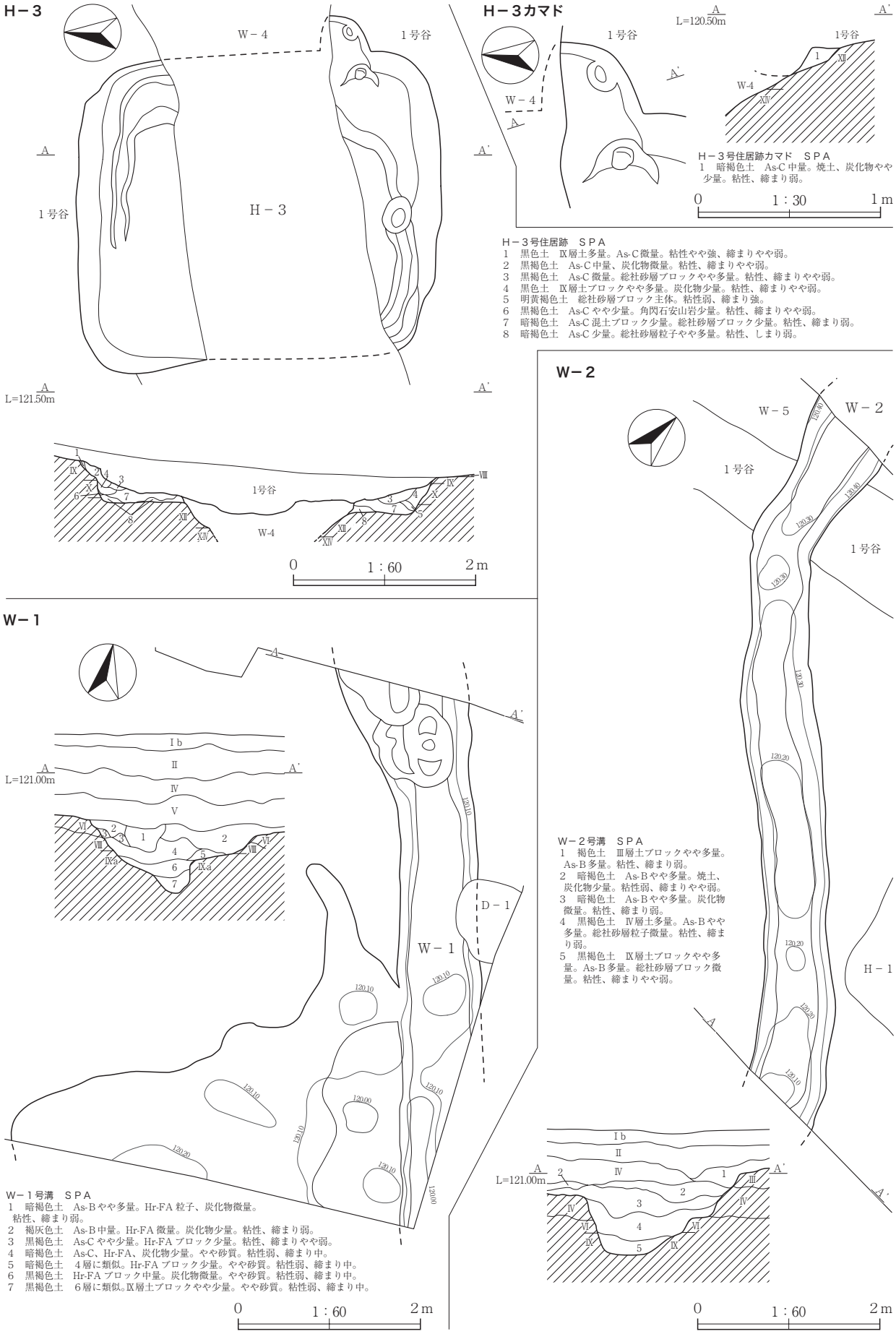
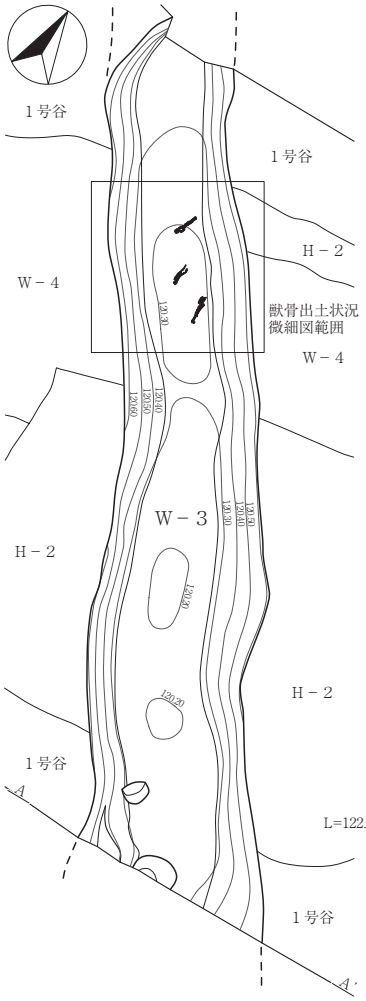
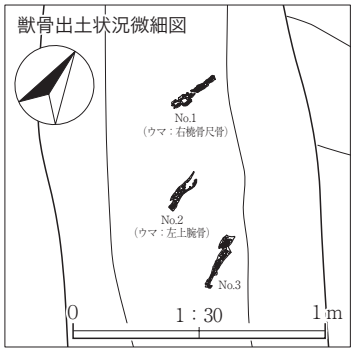


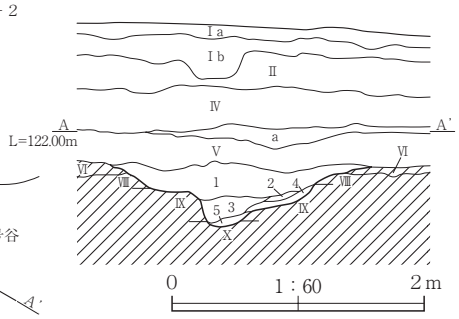
Fig.16　H－3号住居跡、W－1・2号溝跡



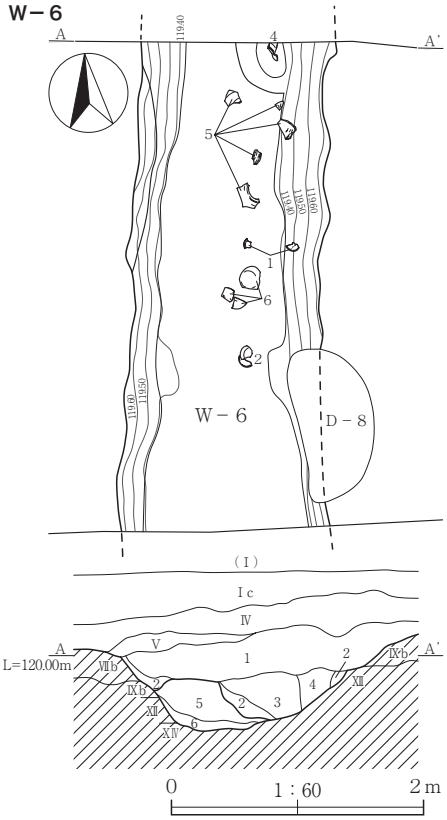
W－3



W－３号溝　ＳＰＡ
1　暗褐色土　As-Bやや多量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。
2　暗黄褐色土　As-B少量。総社砂層ブロック多量。粘性、締まりやや強。
3　黒褐色土　As-B多量。炭化物微量。粘性、締まり弱。
4　黒褐色土　As-B中量。粘性やや強、締まり弱。
5　暗褐色土　As-B少量。Ⅸ層土ブロック、総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや強。
a　暗褐色土　As-B多量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや強。（W-3に起因する窪地の堆積層）



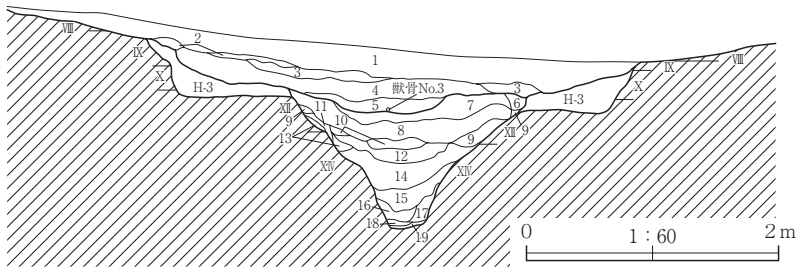
W－6

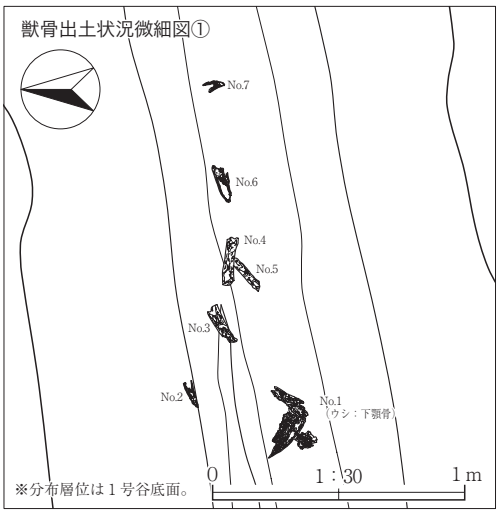


W－６号溝　ＳＰＡ
1　黒褐色土　As-C中量。Hr-FA少量。粘性、締まり弱。（新段階覆土）
2　暗黄褐色土　As-Cやや少量。総社砂層ブロック中量。粘性、締まり弱。（新段階覆土）
3　暗褐色土　As-C中量。Hr-FAブロック、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。（新段階覆土）
4　黒褐色土　As-C、炭化物少量。やや砂質。粘性、締まり弱。（新段階覆土）
5　暗褐色土　Hr-FA粒子、総社砂層粒子やや少量。やや砂質。粘性、締まり弱。（古段階覆土）
6　褐灰色土　砂礫多量。総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。（古段階覆土）

W－4・1号谷

W－４号溝・１号谷　ＳＰＡ
1　暗褐色土　As-C中量。炭化物微量。粘性、締まりやや弱。（1号谷覆土）
2　暗褐色土　As-C、角閃石安山岩微量。粘性やや弱、締まりやや強。（1号谷覆土）
3　褐色土　As-Cやや少量。総社砂層ブロック中量。粘性やや弱、締まり強。（1号谷覆土）
4　暗褐色土　As-C、Hr-FA、総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや弱。（1号谷覆土）
5　暗褐色土　As-Cやや少量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや弱。獣骨片を含む。（1号谷覆土）
6　暗褐色土　As-C少量。総社砂層ブロックやや多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
7　暗褐色土　As-C少量。総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まりやや弱。（W-4覆土）
8　暗褐色土　As-C中量。総社砂層粒子、焼土ブロック微量。粘性、締まりやや弱。（W-4覆土）
9　暗黄褐色土　As-Cやや少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
10　黄褐色土　総社砂層ブロック多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
11　暗褐色土　As-C、総社砂層粒子やや少量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
12　暗褐色土　As-Cやや少量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まりやや弱。（W-4覆土）
13　暗黄褐色土　９層に類似。As-C少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
14　暗褐色土　As-C少量。総社砂層ブロックやや少量。総社砂層粒子中量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
15　暗黄褐色土　As-C少量。総社砂層粒子多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
16　黄褐色土　As-C少量。総社砂層ブロック、粒子多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）
17　暗褐色土　As-C微量。総社砂層ブロックやや多量。粘性やや弱、締まり弱。（W-4覆土）
18　黒褐色土　Ⅸ層土やや多量。粘性、締まりやや弱。（W-4覆土）
19　明黄褐色土　As-C少量。総社砂層粒子多量。粘性、締まり弱。（W-4覆土）





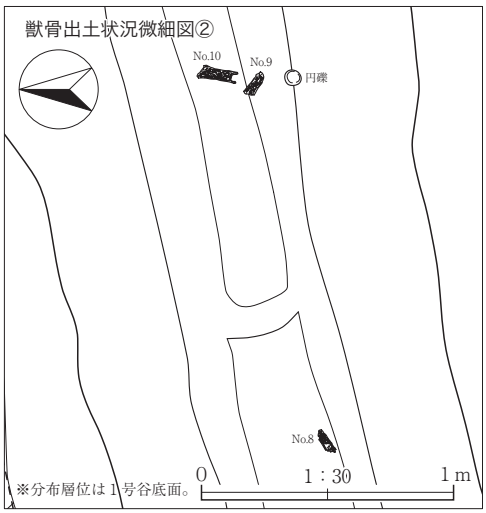


Fig.17　Ｗ－３・４・６号溝跡、１号谷

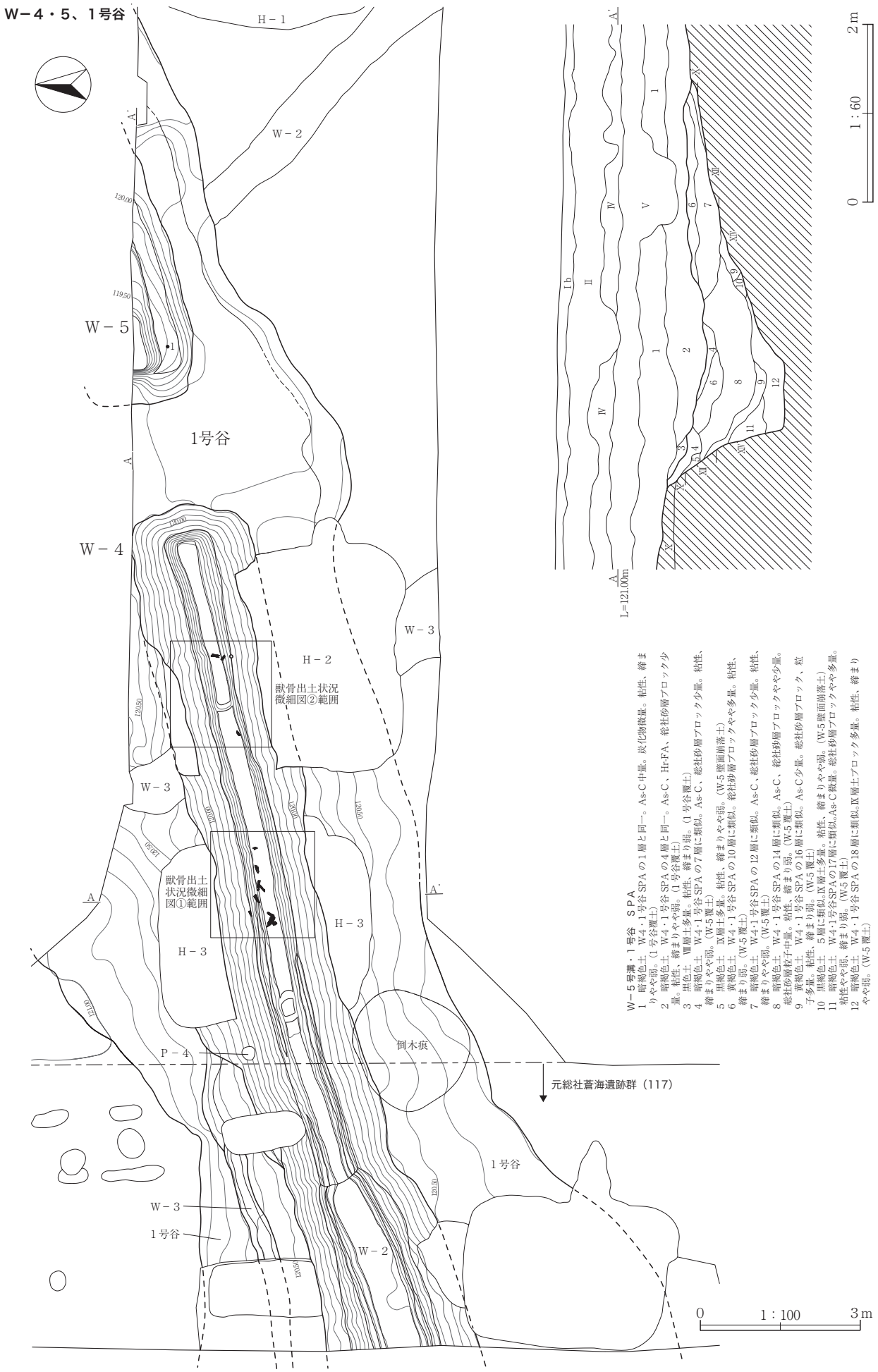


Fig.18　W－4・5号溝跡、1号谷

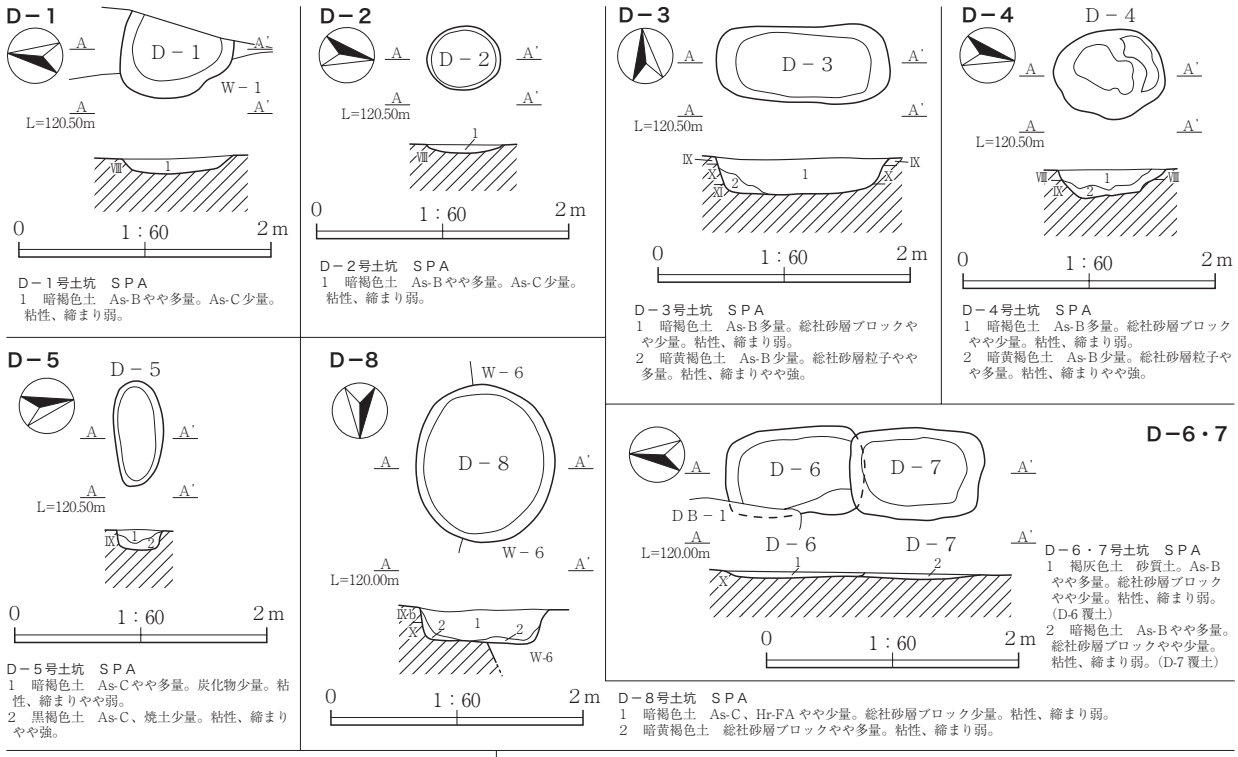


Fig.19　土坑、土坑墓、ピット

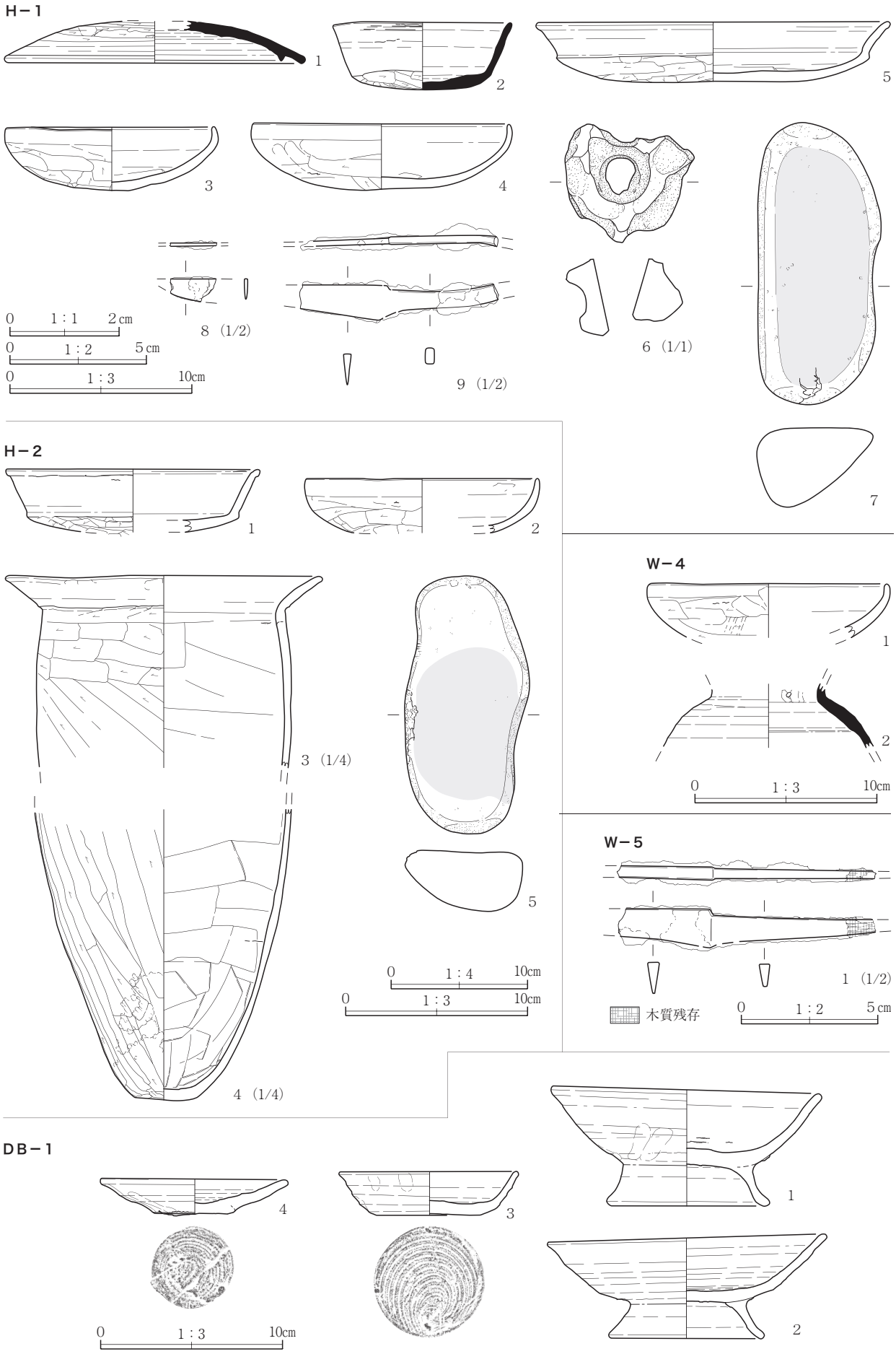


Fig.20　H－１・２号住居跡、W－４・５号溝跡、ＤＢ－１号土坑墓出土遺物

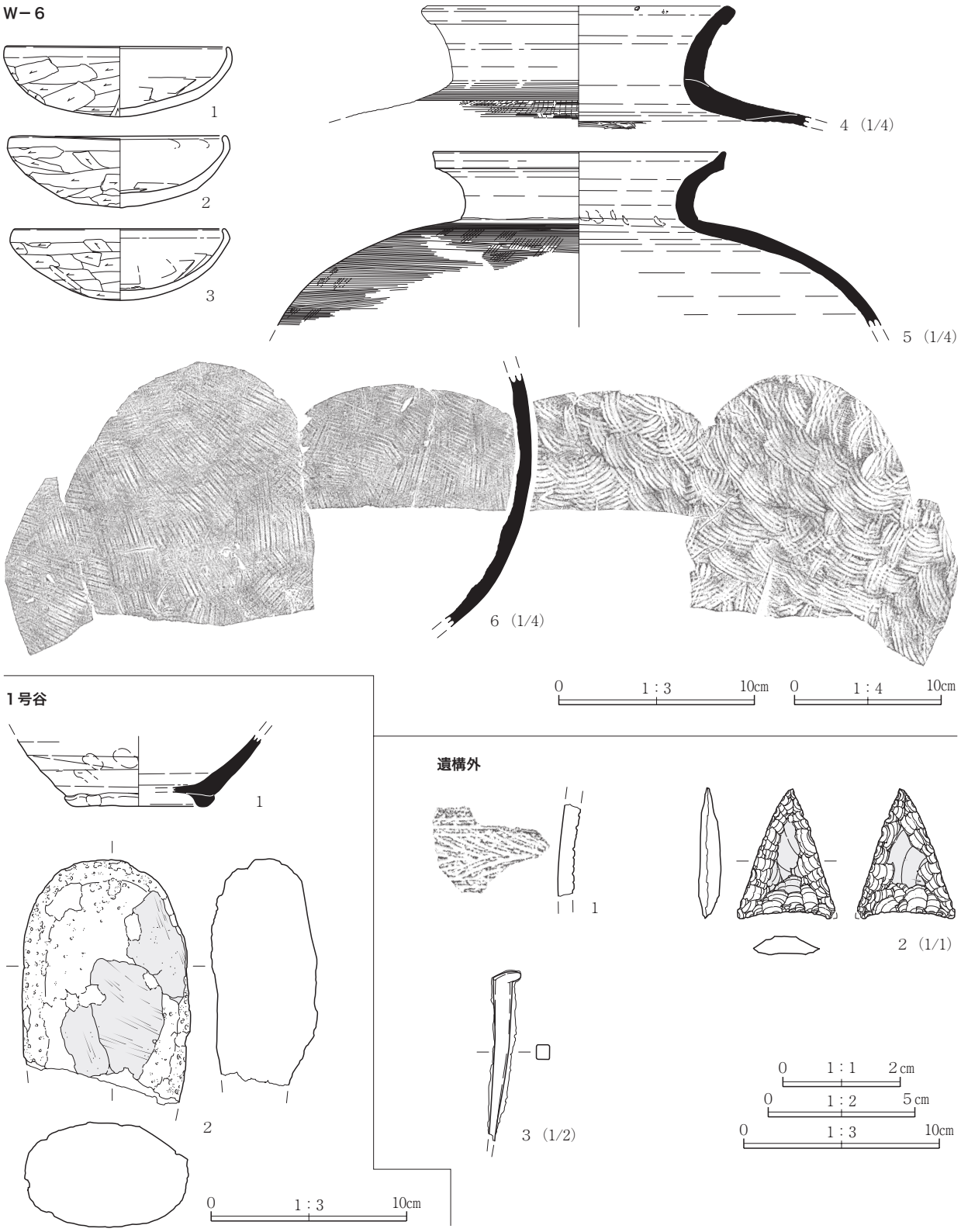


Fig.21　W－6号溝跡、1号谷、遺構外出土遺物

Tab. 4　出土遺物観察表

H－1

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.5	須恵器 坏蓋	〔16.3〕	－	(2.3)	白・黒色粒	堅緻	外：灰色 内：灰色	外面：ロクロナデ後天井部2/3回転ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ後天井部ナデ。カエリ有。	1/5残存。 覆土上層。
2	覆土	須恵器 坏	9.8	7.6	3.7	長石、白・黒色粒	堅緻	外：灰色 内：灰色	外面：口縁部に浅い横位沈線2条。ロクロナデ→底部静止ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。	3/4残存。 覆土上層。 TK217型式。
3	No.1,2	土師器 坏	11.4	－	3.5	角閃石、石英、長石、白・黒色粒	良好	外：明褐色 内：明褐色	外面：口縁部内屈。ユビナデ→底部中位以下ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内面：底部ユビナデ→底部上半～口縁部ヨコナデ。	4/5残存。 覆土下層。 北武蔵型坏。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
4	覆土	土師器 坏	〔14.0〕	－	3.7	角閃石、石英、長石、白・黒色粒	やや不良	外：橙色 内：橙色	外面：口縁部直立。ユビナデ→底部中位以下ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。	1/3 残存。 北武蔵型坏。
5	覆土	土師器 皿	〔19.3〕	－	3.3	結晶片岩、石英、白・黒色粒	やや不良	外：橙色 内：橙色	外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。須恵器蓋模倣坏形。 内面：口縁部ヨコナデ。	1/2。 覆土上層。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
6	覆土	貝巣穴痕 軟質泥岩	(2.2)	(2.4)	(1.6)	軟質泥岩	－	にぶい橙色	3.4g	貝巣穴状の小孔多数。全面被熱顕著。	破片。
7	No.6	石製品 磨石	15.5	6.8	4.7	安山岩	－	暗オリーブ灰色	754.2g	摩滅顕著。	完存。 壁周溝内。
8	掘り方	鉄製品 刀子	(2.5)	1.4	0.2	鉄	－	－	1.7g	－	破片。
9	No.7	鉄製品 刀子	(7.3)	1.4	0.6	鉄	－	－	6.8g	－	端部欠損 カマド掘り方。

Ｈ－２

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.7	土師器 坏	〔13.8〕	－	(3.5)	角閃石、石英、長石、黒・赤色粒	良好	外：橙色 内：にぶい橙色	外面：口端部外屈。口縁部ヨコナデ。稜部上端沈線状のヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面：口端部に横位沈線１条。口縁以下ヨコナデ。	破片。 床面直上。 須恵器蓋模倣坏。
2	覆土	土師器 坏	〔12.6〕	－	(3.1)	黒雲母、石英、黒色粒	良好	外：にぶい橙色 内：橙色	外面：口縁部外傾。ユビナデ→底部中位以下ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。 内面：ヨコナデ。	破片。 北武蔵型坏。
3	No.1,2	土師器 長胴甕	〔23.0〕	－	(14.1)	黒雲母、長石、チャート、黒・赤色粒	良好	橙色	外面：口縁部ヨコナデ、胴部斜位ヘラケズリ→肩部横位ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ、肩部以下ヘラナデ。	口縁～胴部上半破片。 カマド内。 武蔵型甕。
4	No.1,2	土師器 長胴甕	－	4.5	(21.1)	黒雲母、長石、黒・赤色粒	良好	橙色	外面：底部ナデ→胴部縦位ヘラケズリ。スス状付着物。 内面：ヘラナデ。	胴部下半～底部残存。 カマド内。 武蔵型甕。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
5	No.6	石製品 磨・敲石	14.2	6.9	3.8	泥岩	－	緑灰色	420.0g	摩滅顕著。側面敲打痕。	完存。 床面直上。

Ｗ－４

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	土師器 坏	〔13.0〕	－	(2.9)	角閃石、長石、チャート	良好	にぶい橙色	外面：口縁部直立。口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。	破片。 北武蔵型坏。
2	覆土	須恵器 壺	－	－	(4.8)	長石	堅緻	黄灰色	外面：頸部以下ロクロナデ。 内面：頸部絞り成形→頸部以下ロクロナデ。	破片。

Ｗ－５

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.1	鉄製品 刀子	〔9.4〕	1.6	0.5	鉄	－	－	15.2g	茎部に木質残存。	端部欠損。 覆土上層。

Ｗ－６

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	№.7,8	土師器 坏	11.3	－	3.6	角閃石、長石、黒色粒	良好	橙色	外面：口縁部内屈。口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。底部黒斑。 内面：底部ヘラナデ→口縁部ヨコナデ。	1/2 残存。 ３～４層中。 北武蔵型坏。
2	No.1,2	土師器 坏	11.0	－	3.7	黒雲母、長石、赤色粒	良好	橙色	外面：口縁部内屈。底部上端ユビオサエ→口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。 内面：底部ユビナデ→口縁部ヨコナデ。	4/5 残存。 ３～４層中。 北武蔵型坏。
3	覆土	土師器 坏	10.8	－	3.7	黒雲母、石英、長石、黒色粒	良好	橙色	外面：口縁部内屈。底部上端ユビオサエ→口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。 内面：底部ユビナデ→口縁部ヨコナデ。	3/4 残存。 ３～４層中。 北武蔵型坏。
4	No.1	須恵器 甕	〔20.5〕	－	(8.3)	長石、チャート、黒色粒	堅緻	外：灰色 内：灰色 断：黄灰色	外面：口端部突帯状に肥厚。肩部平行タタキ→口縁部ロクロナデ→肩部カキ目。 内面：肩部同心円当て具→口縁部ロクロナデ。	口縁～肩部破片。 ３～４層中。
5	No.1 ～ 6	須恵器 甕	〔19.9〕	－	(12.0)	結晶片岩、チャート、白・黒色粒	堅緻	灰色	外面：口端部有段。肩部以下平行タタキ→口縁部ロクロナデ→肩～胴部上半カキ目。 内面：肩～胴部同心円当て具→口縁部以下ロクロナデ。	口縁～肩部破片。 ３～４層中。
6	No.9 ～ 11	須恵器 甕	－	－	(15.6)	長石、チャート、白・黒色粒	やや堅緻	外：灰黄褐色 内：にぶい褐色	外面：平行タタキ。 内面：同心円当て具→部分的にハケナデ。	胴部破片。 ３～４層中。

ＤＢ－１

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.2	須恵器 高台付埦	14.7	8.6	6.6	輝石、石英、長石、チャート、白・赤色粒	良好	橙色	外面：高台貼付→ロクロナデ。高足高台。 内面：ロクロナデ。	4/5 残存。 覆土中層。 酸化焔焼成。
2	No.3 ～ 5	須恵器 高台付埦	15.1	8.4	5.7	角閃石、石英、白・黒・赤色粒	良好	橙色	外面：底部回転糸切り→高台貼付→口縁～高台部ロクロナデ。高足高台。口縁部黒斑。 内面：ロクロナデ。	略完存。 覆土中層。 酸化焔焼成。
3	No.1	須恵器 小皿	9.7	5.8	2.4	角閃石、長石、赤色粒	良好	にぶい黄橙色	外面：底部回転糸切り→口～体部ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	略完存。 覆土中層。 酸化焔焼成。
4	覆土	須恵器 小皿	10.2	4.4	2.1	輝石、石英、長石、黒・赤色粒	良好	橙色	外面：底部回転糸切り→口～体部ロクロナデ。 内面：ロクロナデ。	4/5 残存。 覆土上層。 酸化焔焼成。

１号谷

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 高台付埦	－	〔6.9〕	(3.6)	黒雲母、長石、白・黒・赤色粒	やや不良	灰黄色	外面：ロクロナデ→高台貼付。 内面：ロクロナデ。	破片。 覆土下層。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	覆土	石製品 磨石	(12.6)	8.6	5.5	角閃石安山岩	－	灰黄色	381.8g	角の取れた角閃石安山岩の円礫。一部が異常摩滅。	端部欠損。 覆土上層。

遺構外

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	遺構外	縄文土器 深鉢	－	－	(4.5)	輝石、白・黒色粒	良好	にぶい黄橙色	縄文施文後、半裁竹管状の工具で平行沈線による横区画を施し、区画内に平行沈線を矢羽状に充填する。	破片。 諸磯ｂ式。

No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	遺構外	石器 無茎鏃	2.2	1.6	0.4	頁岩	－	灰色	1.3g	表裏共に連続する丁寧な周縁剥離を施し、直線的な側縁を作出する。基部は緩やかな凹基状。表裏面共に中央付近が摩滅。	略完存。
3	表土	鉄製品 釘	(5.8)	0.5	0.5	鉄	－	－	8.8g	－	端部欠損。

Ⅶ　発掘調査の成果と課題

今回の調査地点は、上野国府域の推定域内に位置し、御霊神社が鎮座する谷を挟み東側の微高地には、一連の国庁推定地を間近に望むことができる。その政治史的な地勢を反映するようにして見つかったＷ－４～６は、過去の周辺調査例に連なるもので、南北 300 m以上にわたり延々と蒼海遺跡群の台地を縦断する。この台地上は総社砂層と呼ばれる硬質の砂層が厚く堆積する地帯で、長大な溝の開削には、この遺構の発掘調査に労した土掘りなど比にもならない程の、膨大な労働力の投資と意欲をうかがい知ることができる。そこで本節では、この遺構の開削時期と性格について、周辺調査例を参照しつつ、若干の検討を加えてみたい。

Ｗ－４～６号溝跡と周辺調査例　Ｗ－４～６に関連する遺構は、2001 年に小見内Ⅲ遺跡で最初に確認され、古代の遺構で２時期に分かれ、道としても利用されたことが指摘された。2003 年には小見内Ⅵ遺跡で確認され、小見内Ⅲ遺跡の延長上につながり、９世紀後半の住居跡に壊されることが指摘され、上野国府が存在した頃の区画溝と推定された。2006 年には、さらにその延長上の蒼海（１・６）で確認され、一連の遺構と指摘される一方、推定国府や国分尼寺とは走向方向の軸線が異なり、開削は国府造営以前に遡る可能性が問題提起された。2008 年には牛池川の崖線に面した蒼海（17）で確認され、古墳時代後期の開削である可能性が指摘された。その後、2016 年になり、その推定線上の蒼海（117）と本調査地点で、再びこの長大な溝を確認するに至った。

新旧関係と走向　過去の調査で、この遺構は大きく２時期に分かれると指摘された。fig.22 には、各調査地点と埋没状況を整理し、１～ 15 の地点番号で示した。14・15 では、古段階の埋没過程に新段階が再掘削され、以南の６～11では、古段階の西側に新段階が開削される。さらに南の５に重複はなく、南西へ斜行し、その延長が１・２・４につながる。５の東側は、蒼海城の堀跡で“撹乱”され不明だが、その南の３は、１・２と住居跡の前後関係から間接的に古段階、１・２が新段階につながると判断できる。推定した古段階の走向は、牛池川の崖線に

Tab. 5　関連溝跡一覧

番号	遺跡名	遺構名	全長	上幅	下幅	深さ	断面形態	走向方向	硬化面	葉理	砂堆	洗掘	埋戻し	火山灰	重複関係	出土遺物	推定時期	備考	段階
1	**蒼海 (121)**	**W-4**	**(11.01)**	**2.40**	**0.30**	**1.05**	**逆台形状**	**N-74°-E**	**中層**	**×**	**×**	**×**	**中～下層**	**As-C**	**7c 後～ 8c 前住居跡→本跡→ 10c 埋没谷**	**覆土：土師坏、須恵壺**	**8c 中～ 9c**	**蒼海 (117)W-2 から続く。**	**新**
2	**蒼海 (121)**	**W-5**	**(4.56)**	**(2.33)**	**(0.29)**	**1.48**	**逆台形状**	**N-74°-E**	**中層**	**×**	**×**	**×**	**中～下層**	**As-C**	**本跡→ 10c 埋没谷**	**上層：刀子**	**8c 中～ 9c**	**蒼海 (121)W–4 から、掘り残し部を挟み続く。**	**新**
3	**蒼海 (121)**	**W-6**	**(3.40)**	**1.71**	**0.92**	**0.68**	**逆台形状**	**N-5°-E**	**中層**	**×**	**下層**	**×**	**×**	**Hr-FA As-C**	**古墳時代耕起層→本跡 (古段階)→本跡 (新段階)→ 12c 以前土坑**	**覆土 (新段階)：土師坏、須恵甕**	**7c 中～ 8c**	**新旧２段階の再掘削を伴う。**	**古**
4	蒼海 (117)	W-2	(6.30)	2.94	0.23～0.61	1.26	逆台形状	N-74°-E	中層	×	×	×	中～下層	Hr-FA As-C	7c 後～ 8c 前住居跡・土坑→本跡→土坑→ 10c 埋没谷	覆土：須恵蓋・坏・高盤	8c 中～ 9c	蒼海 (121)W-4 から続く。	新
5	蒼海 (6)	W-4	(13.6)	2.23	0.59	1.13	逆台形状	N-25°-E	×	×	×	×	－	(Hr-FP) As-C	本跡→ 10c 後～ 11c 初住居跡	なし	6c 以降～ 10c 前		新
6	蒼海 (1)	W-1	(5.92)	4.15	0.94	1.36	逆台形状	N-10°-E	×	上層	×	×	－	As-C	蒼海 (1)W-2 →本跡	覆土：土師坏、須恵埦、灰釉皿	4c 以降～ 10c		(新)
7	蒼海 (1)	W-2	(5.18)	(1.36)	0.64	1.24	逆台形状	N-14°-E	×	×	×	×	－	As-C	本跡→蒼海 (1)W-1	－	4c 以降～10c 以前		(古)
8	蒼海 (20)	1 区 W-1	(6.0)	2.70	0.72	0.87	逆台形状	N-5°-W	×	×	×	×	－	(Hr-FP) As-C	蒼海 (20)W-2 →本跡→ 10c 後～ 11c 前住居跡	－	8c 中～ 10c 前		新
9	蒼海 (20)	1 区 W-2	(6.4)	4.06	1.10	1.30	逆台形状	N-16°-E	×	×	×	×	－	(Hr-FP) As-C	本跡→蒼海 (20)W-1 → 10c 後～ 11c 前住居跡	覆土：須恵蓋・坏	6c 以降～8c 前		古
10	小見内Ⅵ	A 区 W-4	(24.6)	1.8	0.5	0.65	逆台形状	N-10°-E	上～中層	×	×	×	－	(Hr-FP) As-C	本跡→小見内Ⅵ W-5 →砂岩採掘坑→ 9c 後～ 11c 初住居跡群	覆土：土師坏・台付甕、須恵坏・壺・甕・馬具	7c 後～8c 後		古
11	小見内Ⅵ	A 区 W-5	(27.3)	1.4	0.8	0.91	逆台形状	N-10°-E	上～中層	×	×	×	－	(Hr-FP) As-C	小見内Ⅵ W-4 →本跡→砂岩採掘坑→ 9c 後～ 11c 初住居跡群	覆土：土師坏・須恵蓋・坏・長頸壺、瓦	9c 前		新
12	小見内Ⅲ	3 区 W-3 (A-1)	(5.01)	1.12	0.4	0.97	逆台形状	N-12°-E	上～中層	－	－	－	－	－	本跡・小見内Ⅲ３区 W-4(→ A-1) → 9c 後～ 11c 住居跡群	覆土：刀子	不明～9c 前	小見内Ⅲ３区 W-4(A-1) との前後関係不明。	(古)
13	小見内Ⅲ	3 区 W-4 (A-1)	(4.97)	1.59	0.2	0.31	逆台形状	N-13°-E	上～中層	－	－	－	－	－	本跡・小見内Ⅲ３区 W-4(→ A-1) → 9c 後～ 11c 住居跡群	－	不明～9c 前	小見内Ⅲ３区 W-3(A-1) との前後関係不明。	(新)
14	小見内Ⅲ	12 区 W-3 (A-1)	(8.19)	4.21	0.5	1.25	逆台形状	N-11°-E	上層	下層	上～下層	×	－	As-C	本跡 (古段階)→本跡 (新段階)(・8C 道路状遺構) (→ A-1)	－	4c 以降～12c 以前	新旧２段階の再掘削を伴う。	古・新
15	蒼海 (17)	牛池川調査区 W-5	(5.72)	3.35	0.50	1.76	薬研状	N-12°-E	上～中層	×	×	×	－	－	本跡 (古段階)→ 9c 後～ 10c 前住居跡群・溝跡・砂岩採掘坑	覆土：羽釜	不明～9c 前		(古・新)

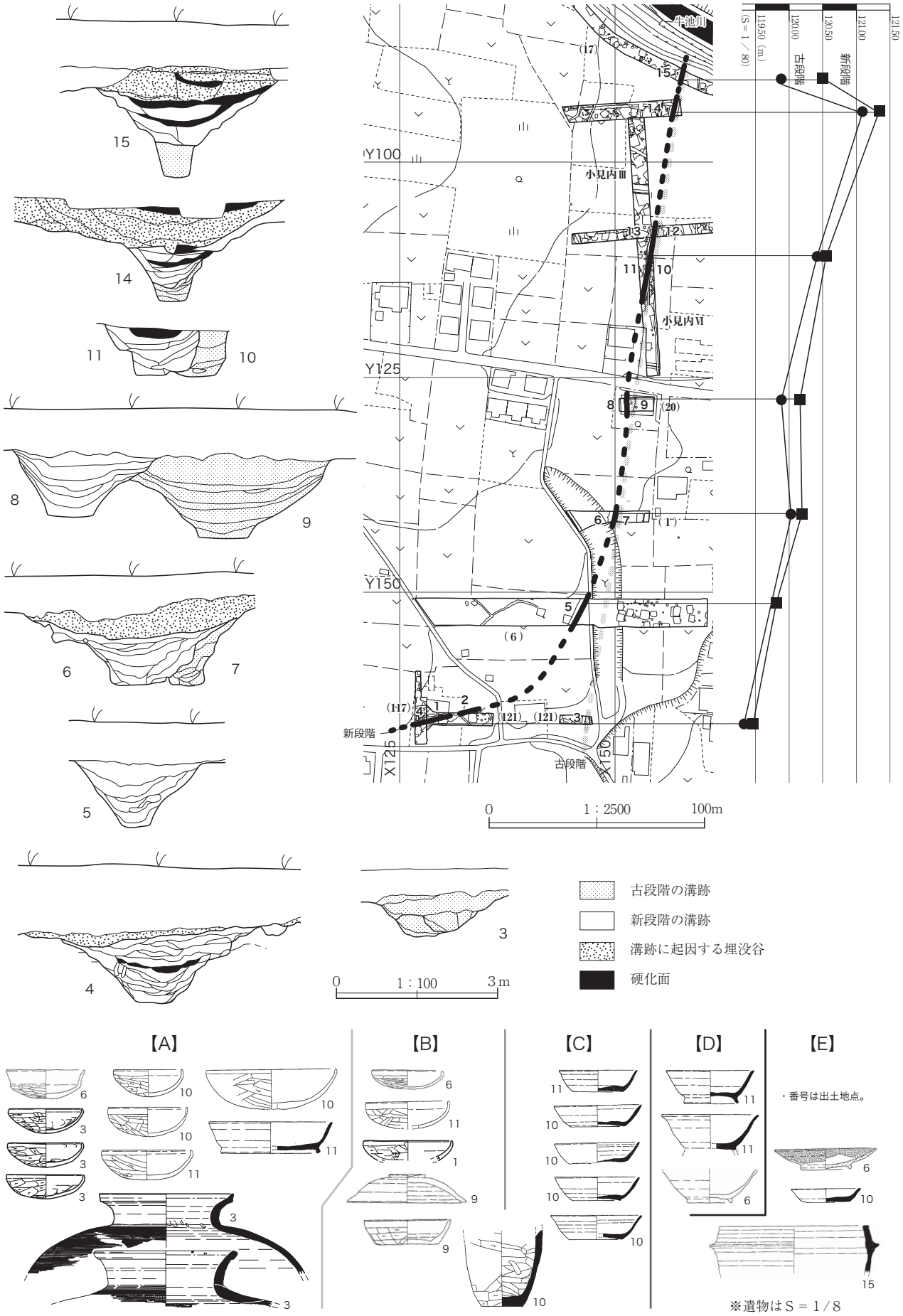


Fig.22　W－4～6号溝跡と周辺調査例

端を発し、北東に８°程度傾きながら直線的に南へ向かう。一方で新段階には、わずかに蛇行しつつ古段階の西側を走向するが、５と６の間で西へ緩やかに屈曲しながら、最終的には北東に74°の走向へ変じて、西へ向かう。

「区画」か「道路」か「用水」か　過去の調査で、区画溝の可能性が指摘された。Tab. 5には、各地点の流水を示す要素を抽出したが、葉理構造や砂堆をもつ地点は少なく、流水の洗掘で抉られた痕跡もない。また、fig.22右上には底面標高の推移を示した。８・９や15の周辺で標高が安定せず、推移はむしろ旧地形に沿うと推測できる。推定した走向の北端は、牛池川の崖線に接するようだが、元総社北川遺跡で確認された該期の牛池川旧河道を参照すると、河床までは約４ｍの落差がある。その堰上げには相応の構造物が必要だが、これを示す遺構や堆積は確認されず、低地平野が発達した地形条件を考えても、その性格を用水とみることは難しい。一方、古段階の走向は、旧地形を無視した直進性を示し、従来の指摘どおり区画の性格が推定できる。これをほぼ踏襲する新段階では、１と２の間が土橋状に掘り残され、区画の性格がより強い。また１・４の底面には、開削の単位と判断できる幅と深さの差異が観察でき、開削の計画性と労働力編成の規模を推測できる。道路を示す硬化面は、新段階とその上部にできた谷の埋没過程で部分的に確認できる。つまり、一連の遺構が埋没し区画性が揺らぐ中で、細長い谷地状に残された空閑地の土地利用として、変則的な“路地”が生じたと推測できる。

時期と変遷　古段階は３で古墳時代の耕起層を壊し、６～15で新段階に壊される。新段階は１・４で８世紀前半の住居跡を壊し、11・13・15で９世紀後半の住居跡に壊される。つまり、重複関係からは大まかに、古段階は古墳時代以降、新段階は８世紀前半以降に開削され、９世紀後半には埋没したことがわかるが、もう少し時期を限定してみる。fig.22下段には、出土遺物を時期毎に分けた。覆土出土で一括性は低いが、その傾向を概観すると、まず、ＤとＥの間には時間的な空白があり、上位の埋没谷に起因する可能性がある。最も古いＡには、模倣坏や口縁下端まで外面へラケズリがおよぶ武蔵型坏が含まれる。Ｃには、底部回転糸切り後無調整で口径底径比の低い須恵器坏が含まれ、Ｄは深身の須恵器高台付埦を含む。古段階には、Ａが再掘削の覆土中に含まれ、Ｃまで確認できる。一方、新段階にはＤが確認できる。以上の点から、古段階は７世紀中葉～８世紀末、新段階は８世紀末～９世紀中葉の年代観が推定できる。

小結と展望　口絵には、同様の手法で時期を判断した溝跡と道路跡を推定古地形に示した。本稿でみた長大な溝は、古段階には一連の国庁推定地の西側を南北に直進する。いわゆる「国府方八町説」は現在、国府調査例の増加で再検討が進むが（江口2014）、これを意識しつつ歴史地理学的な手法で推定された上野国府域の復元案（近藤1981、木津1988、川原2011）の、西縁に似た位置を示す点は興味深い。またその開削は、古くても７世紀末を遡らないという国府域自体の成立時期（山中1994、大橋2005）に先行し、上野国府の成立時期は不明だが、これに影響を及ぼすような地域開発が、総社古墳群や山王廃寺の造営主体により、地域の社会的な主導権が維持されただろう時期に推定できることは、地域における社会構造の実際を考える上で重要だろう。新段階にその走向は、途中から国府域推定範囲の西側へ逸脱する。この頃には国庁も存在していたであろうが、新段階への改変が「おくらがわ」（川原2011）を挟み、国庁Ｂ案の西側微高地を意識したものか、上野国分尼寺南方の空間を意識したものかはわからない。また、具体的な開削時期は不明だが、蒼海（７・58）などの国庁推定地近辺で確認される「大溝」には規模で及ばず、新段階への変更に際しても、旧来の規模と形状が意識されたことに、その性格の差異を見出すことができるだろう。国庁推定地周辺の「大溝」は、蒼海（58）の遺物出土状況をみるに、10世紀代には機能を維持しているが、本稿で検討した一連の遺構は、この頃には役目を終えて路地や宅地へ変遷する。ちなみに、その区画性が失われた後は、本遺跡Ｗ－１や蒼海（118）Ｗ－２、小見内Ⅳ遺跡Ｗ－１・２・５などに確認できる、台地上の微地形によって緩やかな制限を受けつつも、地域の中枢を短い道のりでつなぐ、交通の実態にかなった、北西－南東方向の動線に変遷するようで意味深い。この走向を意識した道路は、蒼海城の絵図や陸軍迅速図にも確認できる。さらにその名残りは、現在は確認しにくくなったものの、区画整理事業以前に撮影された航空写真（国土地理院撮影:CKT74-18 C28-7/27-6）にも、はっきりと見ることができるのである。

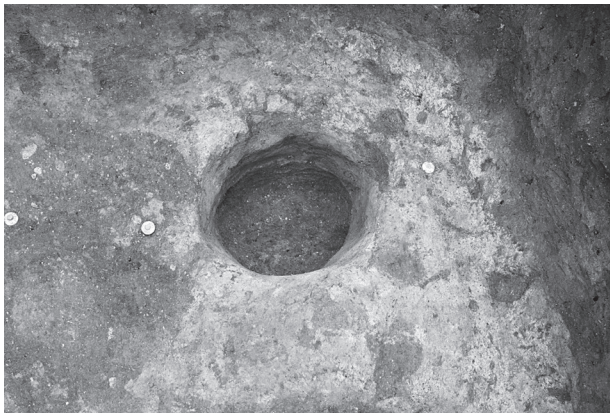
西側調査区全景（西から）

東側調査区全景（北西から）

Ｈ－１全景（西から）

Ｈ－１カマド全景（西から）

Ｈ－１棚状施設全景（北西から）



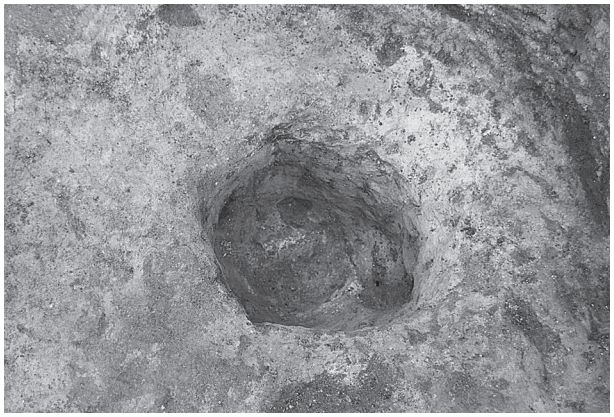
Ｈ－１貯蔵穴全景（西から）

Ｈ－１カマド周辺部全景（西から）

Ｈ－１カマド掘り方全景（西から）

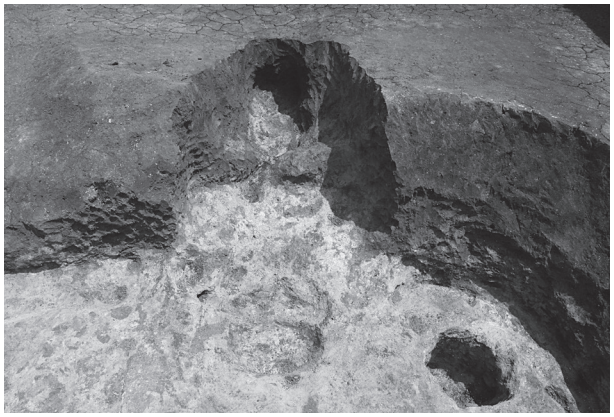
Ｈ－２全景（北から）

Ｈ－２カマド全景（西から）



Ｈ－２貯蔵穴全景（西から）

Ｈ－２掘り方全景（北から）



Ｈ－２カマド掘り方全景（西から）

Ｈ－３全景（西から）

Ｈ－３カマド全景（西から）

Ｗ－３全景（北西から）

Ｗ－３獣骨No.１～３出土状況（南西から）

Ｗ－４全景（北東から）

Ｗ－４・５間の遺構検出状況　土橋状に地山が残る（南東から）

Ｗ－５全景（南西から）

Ｗ－６遺物出土状況（南から）

ＤＢ－１遺物・人骨出土状況（南西から）

１号谷獣骨No.１～３出土状況（北西から）

１号谷獣骨No.３～７出土状況（南東から）

調査風景（北から）

H-1-1
H-1-3
H-1-4
H-1-5
H-1-2
H-1-8（1/2）
H-1-9（1/2）
H-2-1
H-2-3（1/4）
H-2-2
H-1-6（1/1）
H-1-7
H-2-5
H-2-4（1/4）
W-4-1
W-4-2
W-5-1（1/2）
W-6-1
W-6-5
DB-1-1
W-6-2
W-6-6
DB-1-2
W-6-3
DB-1-3
DB-1-4
W-6-4
遺構外-1
1号谷-1
1号谷-2
遺構外-3（1/2）
遺構外-2（1/1）

報告書抄録

カタカナ	モトソウジャオウミイセキグン（121）
書名	元総社蒼海遺跡群（121）
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	－
シリーズ名	－
シリーズ番号	－
編著者名	小峰　篤・中村岳彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371－0031　群馬県前橋市下小出町１-15-３
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371－0853　群馬県前橋市総社町３-11-４
発行年月日	2017年３月24日

フリガナ	フリガナ	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群 （121）	マエバシシモトソウジャマチ 前橋市元総社町 1776-1、1776-2、 1789-2	102021	28A226	36° 23′ 28″	139° 1′ 53″	20160707 ～ 20160826	247㎡	前橋都市計画事業 元総社蒼海土地区 画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 （121）	集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代 中～近世	住居跡　３軒 溝跡　６条 土坑墓　１基 土坑　９基 ピット　４基 埋没谷　１箇所	須恵器 （蓋・坏・埦・甕・壺） 土師器（坏・長胴甕） 縄文土器 鉄製品（刀子・釘） 石器（石鏃） 石製品（磨石・敲石） 貝巣穴痕軟質泥岩	推定上野国府域の西縁付近で、７世紀中葉～８世紀末と８世紀末～９世紀中葉の溝跡２条を確認した。この溝跡は、周辺調査地点で確認されている、南北に走向する長大な区画溝の一部と推定できる。

元総社蒼海遺跡群（121）

前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年３月13日　印刷
2017年３月24日　発行

発行　前橋市教育委員会事務局文化財保護課
〒371－0853　群馬県前橋市総社町３-11-４
TEL　027-280-6511

編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社